

教職大学院 Newsletter No. 183

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2024.6.8(公開版)

語りたい子供の姿がある、語り合いたい仲間がいる

福井大学教育学部附属幼稚園 副園長

観 寿子

「感動しました」4月の始め、園内で保育を語り合っていた時に、今年度の異動で附属幼稚園に来られた先生がおっしゃられました。その日は、入園式・始業式の前日でしたが、具体的な子供の姿をもとに園の研究についてイメージをもって、職員みんなで今年度の保育をスタートしたいと、保育について語り合う時間が設けられました。まず研究主任が、4月の



午前中に数回行われた預かり保育で遊びの写真をもとに話を始めました。その後、各先生方から次々と、環境と出会ったり試したりしている子供の姿、子供のつぶやきや様子を見取って瞬時に遊びや環境をつくって関わっている先生の姿、我が子の「好き」に気付いて先生が関わってくれたことを喜んでいて保護者の話などが語られました。その様子を見て、転任して来られた先生が、まだ始業式前なのにこのような時間が設けられ、先生方みんなが楽しそうに語り合っている様子に感動したとおっしゃっていました。

この先生の言葉を聞いて、昨年度最終の本園の評議員会で、評議員のお一人の方がおっしゃってくだ

さった「語りたい子供の姿がある」「語り合いたい仲間がいる」という言葉が思い浮かびました。その両方はいつでもどこでもあるわけではないということも、続けて話してくださいました。その評議員会では、1～2月の4回の園内での研究会に、他園の先生方も参加していただいたことについて報告しました。4回で累計9園17名の他園の先生方が参加され、毎回予定していた研究会の時間が終わっても本園職員と長く話されている方もおられて、もっと保育について語りたいという思いが伝わってきました。

園内で行っている研究会を、他園の先生方にも開いていけるとよいのではないかとということになったのは、昨年度11月の幼児教育研究集会の少し前のことでした。本園では、毎年11月初旬に、幼児教育研究集会を開催しています。白梅学園大学名誉教授の無藤隆先生や福井大学理事の松木健一先生に研究の全体指導者として関わっていただき、「つながりが育

内容

巻頭言	(1)
スタッフ紹介	(3)
院生自己紹介	(6)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(19)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(23)
4月月間合同カンファレンス報告	(31)
研究紀要紹介・書評	(38)
お知らせ	(41)

む学びの深まり」という研究主題のもと、今年度は、「好きが広がり、世界をひらく」という研究副題の3年次となります。研究集会は、11月2日（土）に予定しています。

この研究集会の午後の分科会では、平成27年度から県幼児教育支援センターの市町幼児教育アドバイザー養成研修受講生が研修の一環としてグループの話し合いのファシリテーターをしてくださり、参加者がその日見た子供の姿や遊びをもとに保育について語り合う、熱量をととても感じる時間です。しかし、国立大学附属幼稚園として、その日に参加できない県内の園の先生方にも保育について語り合える場を提供することができないか、と考えていました。そこで、すでに園内で行っている研究会に参加していただくことなら今すぐにでもできるのではないかという話になり、「保育の質向上プロジェクト」と銘打って、昨年度11月の研究集会で参加者に案内チラシを配布しました。そうしたところすぐに申込みや問い合わせをいただき、計画した1回目の園内の研究会から他園の先生方に来ていただくことができました。

大切なお子さんの命を預かる保育の現場は、大変なことがたくさんあり、いろいろな問題も報じられています。しかし、大変なことだけでなく、保育の楽しさややりがいの面も、多くの保育者がもっと実感したり、広く発信したりできるような取組に附属幼稚園として関わっていきたいと思っています。

昨年度は、本園の保育について保護者と語る会も設けました。そのきっかけとなったのは、令和6年1月に、本園がソニー幼児教育プログラム 2023 年度保育実践論文で最優秀園を受賞したことです。論文は、「好きが広がり、世界をひらく～宇宙研究所を通して～」というタイトルで、その年度の年長児の「宇宙に関わる遊び」の事例を中心にしたものでした。

受賞を記念して、2月に本園の研究概要と研究の視点で捉えた「宇宙に関わる遊び」について、年長の保護者に紹介するという時間を設け、感想をいただきました。そうしたところ、もっと附属幼稚園の保育について語る時間がほしいという保護者の声をいただいたのです。そこで、1時間程の語る会を4回設定



し、各回、希望される数人の保護者と年長担任の語り合いが行われました。本園が大事にしている一人一人の「好き」に寄り添った保育に対する保護者の思いや、園での遊びと家庭での子供の様子のつながり、保護者が幼稚園の3年間でお子さんの成長を感じられているところ等、どの回に来てくださった保護者も、生き生きとお子さんの様子を語ってくださったり、他の保護者の話を笑顔で頷きながら聞かれたりしていました。保護者同士や保護者と保育者が、大事なお子さんのことを語り合いたい仲間のような関係性になっているのではないかと、思いました。

今年度、本園は、Instagramを始めることにしました。本園では、月に1～2回、木曜日の午後に未就園児のお子さんとその保護者を対象に子育て広場を行っています。この場をより多くの若い保護者に活用してもらい、悩みが尽きない子育てのことを、本園職員や大学の専門の先生と話す場があってほっとできる、子育ては楽しいと思えるようになってきた等と保護者が感じられるような子育て支援の一助を担いたいと考えています。

前述した本園の園内での研究会や、この子育て広場が充実しているのは、福井大学や福井大学連合教職大学院の先生方が関わってくださっているからです。昨年度、公立小学校から異動してきた私は、一つの園にこれほどの大学や大学院の先生方が日常的に関わってくださっていることに、とても驚きました。その先生方と語り合い学び続けられているおかげで、本園の職員もより保育の楽しさや子供の成長に関わるやりがいを感じることができていると思います。

また、令和2年度から幼稚園と義務教育学校を校園長が12年間をつなげて見てくださるようになり、令和3年度から附属幼稚園と義務教育学校は合同の教育研究集会が始まって、これまでの研究紀要を読む中で、探究を核にして語り合う機会が多くなっていると感じました。そして、昨年度から、3～5歳児を「Sprouting Stage(芽吹く)」、1～4年生を「Growing Stage(成長する)」、5～9年生を「Bloomimg Stage(咲き誇る)」として、一層育ちのつながりを意識して語り合うようになっていると思います。今年度の教育

研究集会は、6月14日(金)に行われますので、ぜひご参加ください。

今年度も、「好きな遊びの時間」と「みんなの時間」の充実を図り、子供たちが「やりたい・話したいことがある、一緒にやりたい・話したい仲間がいる」という幼稚園を目指して、同僚や保護者、義務教育学校や大学・大学院、他園の先生方と一緒に語り合ってくださいの方々がいてくださることに感謝しながら、チームで頑張っていきたいと思います。



スタッフ紹介

富山国際大学子ども育成学部 学部長・教授 松山 友之 (まつやま ともゆき)



今年度から、連合教職大学院で一緒に学ばせていただくことになりました富山国際大学の松山です。

現在、子ども育成学部の学部長として学部の運営等にも取り組んでおります。正直申しますと2つの

大学に所属したような感覚で、まだ慣れないことも多く十分なことができるか大変心配しております。富山県内の学生募集も含め、これから取り組む課題も多く、数年かけて富山県内での拠点を作るつもりで慌てずに取り組んで行きたいと思います。

約2年前に松木副学長、三田村教授から連合教職大学院へのお誘いがあり、富山県内の教員養成では実績を残し始めたとはいえ、本当に小さな大学ですので加入が実現するか不安でした。富山県教育委員会や富山国際学園のご理解と多くの先生方のご協力によりようやく実現できたことが嬉しくてなりません。

加えて福井大学のみなさまのご協力に深く感謝したいと思います。

さて、自己紹介をさせていただきます。私自身の専門分野は理科教育です。特に理科の学びを通して児童・生徒の科学的な興味・関心を高めるためにはどうすればよいかをテーマに研究を進めております。さらにその実践のための授業のあり方や課題作り、教材研究について教員養成の視点から取り組んでいます。最近は、「問い」をもつことの大切さを痛感し、教員になる学生のみなさんに理科を通して、「なぜ」「どうして」を大切に、自然を探究する面白さを子どもたちに伝える教員になってほしいと願って授業や研究を進めています。

私自身、長い現場経験を振り返ると、中学校理科を中心に科学的リテラシーの育成や化学領域における物質観の育成などをテーマに取り組んできました。こうやって大学や大学院でも学べるが大変幸せなことだと考えています。また、理科離れが問題になっていた頃からいろいろな機会を通して科学教室も続けています。たくさんの子どもたちの驚き

や笑顔を通して科学の面白さを伝えることはライフワークだと思っています。

大学に勤めてから、自然体験活動やSDGsやESDといった取り組みにも参加しています。「SDGs すごろく in 富山市」を開発し、ゼミ生と一緒に富山市のSDGsウィークにも参加しました。学生みなさんとボランティア活動に参加するのが楽しみの一つです。

富山県は小学校教育研究会や中学校教育研究科の活動が活発で非常に教育熱心な県でもあります。県内で教員の充実した学びができるため、県外の教育事情や素晴らしい実践を発信する部分が少し足りないと感じることもあります。今回の連合教職大学院への加入によって、もっと学びたい研究したいという思いや願いをもった富山県内の現職教員の先生方が集まって新しい学びの場ができることを期待しています。特に300名を超す卒業生がミドルリーダー

となって学び直し場として連合教職大学院に入ってくれることを楽しみにしています。また、ストレートマスターとして連合教職大学院に入学して、さらに学びを広げる学生もこれから出てくると思います。

今まで枠にこだわることなく、現場の先生方や学生、そして社会のニーズに応えることが必要になっています。その意味でも働きながら学ぶことができる福井大学連合教職大学院は非常に大きな意味があると考えています。

まだスタートしたばかりで、どのように参加すればよいか、またどのような学びが展開されるのか、私たち自身が新入生と同じ状況です。皆様方からたくさんのことを学びながら、この富山国際大学が充実した学びを展開するための新しい拠点となるように頑張りたいと思います。

富山国際大学子ども育成学部 准教授 河崎 美香 (かわさきみか)



今年度より、福井大学連合教職大学院のスタッフとしてお世話になります河崎美香と申します。

四半世紀ほど、富山県で養護学校教諭、小学校教諭、大学附属幼稚園教諭、特別支援学校教諭を務め、現在は富山国際大学の教員をしています。専門は特別支援教育です。

私が特別支援教育の道に携わることになった転機となる出来事をお伝えすることで、自己紹介といたします。

私が特別支援教育の道に携わることになった転機となる出来事をお伝えすることで、自己紹介といたします。

富山県で小学校教員として採用された際には、当然、小学校教員として生きていくものだと思っており、ところが、配属された初任校は、知的障害養護学校（現 特別支援学校）でした。養護学校教諭免許状のない私は、障害に関する知識や技術がほとんどない状態で、不安を抱えての初日を迎えることになりました。多くの児童がこの新米教師を歓迎し

てくれるなかで、1名の児童が浮かぬ顔をしていることに気づきました。私はその児童を安心させたい一心で、傍に駆け寄り、視線を合わせながら握手を求めたのです。その瞬間、その子は驚いた表情で私の手を払いのけ、泣きながら自分の頭を拳でガンガン打ち始めました。目の前で起きた事態の意味を理解することができず、茫然自失の中で、涙で視界がぼやけていったことを今でも鮮明に覚えています。初対面の人にいきなり握手を求められたことで驚愕し、そこから生じる子どもの不安定な感情を、当時の私は理解することができずにおりました。様子を見かねた学年主任から、まずは、年間を通して子どもの言動を記録するようにというご助言をいただきました。根気のいる作業でしたが、続けていくうちに、子どもの言動は決して突発的に起こるものではなく、必ず理由が存在していることに気づきました。記録の前後をつなげていくことで、ストーリーという線になり、言動の背景にあるものを掴むことができました。子どもへの理解や支援方法について悩んだ際には、記録を持参し周囲の先生方によく相談をしました。この記録を確認した先生方からの質問に答えること

で、考えを整理することができました。これにより今まで見えてこなかったものが見え、アイデアが閃き、次のチャレンジ目標を立てることができる体験を何度もいたしました。日増しに、「もっと障害について勉強したい」という思いが高まり、翌年から長期休暇を活用して、全国で開催される認定講習に通い始めました。十年余りかけて養護学校教諭二種免許状、一種免許状を取得していききました。普段の実践が理論と結びつき、腑に落ちた瞬間の喜びは**何ものにも代え難い**ものがありました。40代半ばに達したとき、長期派遣研修の機会を利用して、2年間大学院で学び、特別支援学校教諭専修免許状を取得しました。在学時の研究テーマを「巡回相談によってもたらされる、気になる子どもの保育における保育者の自己効力感の変容」といたしました。この課題を研究するために、一年間継続して特定の複数保育施設を訪問し、保育観察をいたしました。また、保育士主体の協議に基づく問題解決型コンサルテーションに参加して実施した保育者へのインタビュー調査は、知見を深め、大きな学びとなりました。日を追うごとに、保育者の目が輝き、語りや実践が変容していく、まさに自己効力感が獲得されていくプロセスの中に私自身が居合わせられたことに心から幸せを感じました。この研究によって、「人は志と変わるための方策を獲

得すれば、いくつになっても変わることができる」という貴重な教えをいただきました。振り返れば、初任校での初日の児童との出会いが、私を特別支援教育へと導いてくれたものと感謝しております。

さて、今年度4月6日、初めて福井大学院に赴き、開講式とそれに続くグループセッションに参加させていただきました。開講式の会場に足を踏み入れた途端、院生の皆さんや先生方からの熱気とパワーが伝わってきました。グループセッションでは、院生の方が今まさにリアルタイムで子どもたちと関わりながら実践されている事例への省察と、それをじっくり聴き入る参加者の雰囲気、そこには信頼関係のもと、共に学び合う仲間がいて、支え合いながら思考を重ね深めておられる姿があり、感動を覚えました。

「学校で学ぶのは何も子どもだけではない。教師も子どもと共に学び育っていくのだ」という発想の転換がものすごく心地よく、ここは人を変える何かがあると感じました。これからご一緒させていただく皆さんと大いに語り合い、学び合い、変容していけることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

富山国際大学子ども育成学部 講師 岩崎 直哉 (いわさき なおや)



初めまして、今年度より教職大学院のスタッフとして、皆様と一緒に学ばせていただく岩崎直哉と申します。自分には何ができて、どのような形で皆さんのお役に立てる

のか、具体的にはまだ分かりません。富山国際大学が連合大学院のお仲間に入れていただき、初年度であるため、これから探りながら道を創っていくところです。できる範囲で積極的に参加しながら、学びの場を広げていくお手伝いが出来たらと考えております。

私は、新潟県で17年間の小学校教員を務めた後、4年前より富山国際大学で教員として働いております。大学では、小学校での実務経験を生かし、教員養成の学生指導に当たっています。また、国語科教育を専門とし、特に「読むこと」の研究を行っています。読むとはどういうことなのか、教室で子どもたちが読み合うことはどのような意義があるのか、また、読む力を養うことは人間形成の上でどのような意味があるのか…などに興味があります。

私のキャリアの転換点は、小学校教員の10年目・11年目の年に現職派遣という形で、上越教育大学教職大学院で学ばせていただいた時期にあります。そもそも、大学院で学びたいと思ったのは、もっと授業

が上手になりたい、自分の実践に理論的な背景を加えて、より確かな授業を行いたいと考えたからです。ですから、大学院に派遣される当時の動機は、定年まで現場で学級担任を続けるために、授業を究めたいと考えたことでした。ところが、上越教育大学教職大学院で学ぶうちに、学術の世界に魅了され、研究の面白さを強く感じるようになりました。現場を離れるさみしさはありますが、研究という形で、国語科教育の営みにかかわり続けることができたなら、自分にとってこれほど刺激的で生産的な活動はないのではないかと考えるようになったのです。

私の素朴な感覚ではありますが、現職の先生方が日々行っている教育実践と大学などで行われている教育研究の世界には、まだまだ乖離が見られるように思います。「実践と理論の往還」という言葉は、教職大学院では特によく耳にしますが、その実現は未だ遠くに感じています。現場実践を理論化する営み、学術研究で得られた知見を実践化する営み。その両方がより盛んになることで、実践と理論の往還は可能になると考えます。私は、実践と理論を橋渡しでき

るような役割を担っていきたいと考えています。この先、そのようなことができた実感されたとき、きっとキャリアの転換は間違っていなかったと振り返ることができると思っています。

さて、これまでに準備期間として、連合教職大学院で行われているカンファレンスに数回参加させていただくことができました。現職教員の皆さんやストレートマスターの皆さんが熱く語る言葉に、また迷いや悩みに共感しようという温かい空気に、とても感銘を受けました。学びというのは自分一人で創るものではないことを改めて感じました。「自分」という概念も決して独りでできるものではないことを強く感じました。自分の声を受け止めてくれる他者がいて、自分の経験を相対化する場があることで、「自分」は今まさに形成されつつあるのだと感じます。

この教職大学院で学ぶ期間が、10年後、20年後、あるいはその先に振り返ってみるときに、皆さんのキャリア形成の1ページとして、確かに意味づけられることを強く願っています。ぜひ、これから一緒に学び合い、語り合っていきましょう。



院生自己紹介

ミドルリーダー養成コース1年(1年履修)/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

浅井 綾子 (あさい りょうこ)

初めまして。この度、福井大学連合教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学しました浅井綾子と申します。専門は、美術です。大学の頃は、油絵で人物画を描いておりました。広い空間で自由に絵を描いたり、ものをつくったりできるあの環境はとても幸せな時間でした。子供たちにも描くことや作ることの楽しさを感じてほしいなと思っております。趣味は、旅行です。最近はなかなか行けていませんが、以前にサクラダファミリアを見た時は、本当に心が

震えるほど感動しました。あの美しさ、荘厳さ、制作の背景に圧倒されました。元々建物の造形美にほとんど興味のない方でしたので、まさかあんなに感動するとは思いませんでした。旅行期間中に何度も足を運ぶほどでした。生で見ることの大切さを実感した瞬間でした。また、完成したらもう一度見ることが私の一つの夢です。

私は、以前に講師を含め、中学校で9年間ほど勤めさせていただきました。その中で美術部をもたせて

いただき、後半の4年間で「美術部だって踊れるぜ！」を掲げ、文化祭等でダンス（既成の振り付けをコピー）をしながら、アートパフォーマンスをすることを部員たちとつくっていました。これは大学の時、サークルでの文化祭で行ったものが発端となっています。ただひたすら描く、作るだけではなく、やはりみんなで何かをするときに生まれる楽しさや喜びを教員になった今でも味わいたいと思っていますし、子供たちにも1つの面白いこととして体験してほしいと思っており取り組んでいました。

現在、附属義務教育学校の前期過程で勤務させていただいております。本校で初めて低学年をもたせていただき、子供たちの自由なものの見方や感じ方に感動をしました。普通に過ごしてしまう日常の見方や感じ方に刺激をくれて、子供たちのおかげで毎日がより素敵になったなと感じております。経験を

通して凝り固まってしまうものの見方や感じ方、自分の嗜好にいつの間にか偏ってしまうことは、とても勿体無いことだと思いました。そして、本校で学ばせていただく中で、子供たちがつくりだす過程を追いかけて、子どもたち一人ひとりが、自分たちの向き合い方で色やものや友達の商品と関わっていることが垣間見ることができて、とても面白いなと感じました。一方で、もっと子どもたちの頭の中、心の中を知りたいと思っています。そして、そこで見つけたことを、授業づくりや子どもたちの学校生活に生かしていけるように学んでいきたいと思っています。また、大学院での学びを通して、今の自分より少しでも自分が変われたらと思います。教職大学院の先生方、院生の皆様、1年間どうぞよろしくお願い致します。

ミドルリーダー養成コース1年/福井県立若狭高等学校

小畑 有海（おばた ゆうみ）

初めまして、ミドルリーダー養成コース1年の小畑有海と申します。私は教員5年目で、福井県立若狭高等学校で勤務しています。担当教科は水産です。初めて担任をした生徒を昨年度卒業させ、今は1年生の担任をしています。写真にもあるように、私は海に潜るのが好きです。幼いころから地元の海で泳ぎ、お風呂に入っては浴槽で息こらえの練習をしていました。そして高校、大学ではスキューバダイビング部に所属し、ダイビングスキルを磨いてきました。私の「有海」という名前には、両親の「海のように広い心を持った人になってほしい」という願いが込められています。願い通りになっているかどうかは定かではありませんが、水産の教員としてぴったりの名前をつけてもらったことに感謝しています。海を学び、海を教える身として、名前にふさわしい人になれるように頑張りたいと思います。

福井県立若狭高等学校には県内唯一の水産系学科である海洋科学科があります。私は水産の教員なの

で、主に海洋科学科の生徒に授業を行っています。具体的には、水産海洋基礎やダイビング、食品管理など幅広く教えています。若狭高校に海洋科学科ができたのは2013年です。それまでは、福井県立小浜水産高等学校という1つの水産高校がありました。小浜水産高校が若狭高校と統廃合を経て、海洋科学科が新設されました。私自身、海洋科学科ができた最初の生徒であり、1期生です。高校時代にお世話になった先生方と一緒に後輩を育てられることに、日々幸せを感じています。

水産の教員を目指したきっかけは、高校時代の恩師との出会いです。前述のとおり、私はもともと海が好きで、中学生のころから地元福井県小浜市にある福井県立大学海洋生物資源学部に進学したいと考えていました。どの高校に進学するか考えているときに、海洋科学科が新設されることを知りました。そして、海洋科学科へ進学することが福井県立大学に入学するための一番の近道であると考え、進学するこ

とにしました。高校に入学して出会ったのが恩師である、小坂康之教諭です。高校時代は担任及び部活動の顧問としてお世話になり、現在は同僚として一緒に働かせていただいています。新設当初の海洋科学科は、若狭高校からすると異質であり、なじめていない部分も多かったです。しかし小坂先生は、新しい学科を創造するために奮闘し、生徒である私たちを導いてくださいました。福井県立大学への進学を目指す私に、福井県立大学との共同調査や各種学会での発表など様々な機会をくださいました。部活動ではダイビングを通して、俯瞰することの大切さを教えてくださいました。時に厳しく時に優しく指導してください（今もそうですが）、自分自身が驚くほどに成長できました。小坂先生はいつも忙しそうにされていた一方で、常に楽しそうでした。そして将来の進路を相談した際には、水産の教員という仕事を「こん

なに楽しい仕事はない」と言われていました。3年間小坂先生を近くで見ていたので、その言葉が嘘ではないことは明らかでした。

水産の教員になった今、毎日が楽しいです。生徒に海を教えつつ、探究学習を通して一緒に海を学んでいます。また、海を通じて地域のみならず世界と繋がり、様々な人と出会えています。しかし今に満足せず、生徒の資質能力育成や地域の Well-being を目指して、まずは私自身が大学院で学びを深めていきたいです。未熟な私を大学院へ派遣してくださった同僚の先生方や管理職の先生に感謝しながらたくさん吸収し、若狭高校に持って帰りたいと思います。教職大学院の先生方、院生の皆さま、2年間どうぞよろしく願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/福井市至民中学校

北川 夏帆（きたがわ なつほ）

はじめまして。福井大学連合教職大学院連合教職開発研究科・ミドルリーダー養成コースに所属しております、北川です。

大阪府で生まれ、中学生以降は福井県で育ちました。福井の暮らしにも慣れて、うっかり大阪弁が出てしまうことはもう少なくなっていました(笑)。福井大学教育学部を卒業し、福井市の至民中学校から教員人生を歩み始めて、今年で4年目になります。現在も至民中学校に勤め、1年生の担任、国語科や道徳科の主任、女子バドミントン部の顧問などをしております。

25歳、教員4年目の未熟な私が、教職大学院のミドルリーダー養成コースで学ぼうと決めた理由を書かせていただきます。

中学生の頃から絶対に教師になると決め、その決意は揺らぐことはなく教員になりました。初任校の至民中学校では、いきなり1年生の担任を任せてい

ただきました。分からないことばかりで、失敗もたくさんしました。根拠のない自信は、すぐに不安に変わりましたが、職場の先生方がいつもサポートしてくださり、私がいつどんなことで頼っても、いっしょに対応や改善策を考えてくださいました。そんな温かな協働環境の中で働かせていただけたので、子どもたち一人ひとりに寄り添うことができました。時には子どもたちにも支えられながら、子どもたちと共に、3年間歩み続けてきました。

3年間の1サイクルを終え、4年目になるにあたり、思い出された言葉があります。それは私が初任の頃、至民中学校の校長をされていた先生からいただいた言葉です。

「これから何を武器として教員をやっていくのか考えていくといい」

私はどんな武器を手にしたいか。専門的に指導できる部活動はない（「なぎなた」という武道を長くや

ってきましたが、中学校に部活動としてはないので活かしていない状況です…。生徒指導、特別支援、ICT、総合、特活…様々な役割がある学校現場の中で、「今磨けるのは国語の授業と学級経営しかない」と当時の私は思いました。

4度目の春、自分に問う。

「私の教師としての武器は何か、これからの私に必要な武器は何か」

3年間を終えて気づいたことがあります。それは「武器」の真の意味です。かつての校長先生が「武器」という言葉で教えてくださったのは、他の教師よりも優れている力や、時代の変化や外部の圧力に負けない強さではなく、教師としての自分の「軸」、教師を続けていくための「誇り」のことなのではないかと

思います。では、教師としての「軸」や「誇り」はと聞かれたら、私はなんと答えるだろうか。

子どもとつくる授業が楽しい。子どもの成長に携われるのが嬉しい。だから、授業も子どもとの関わりも妥協したくない。

この思いが3年前と変わらずに今もあります。しかし、変わりゆく時代、どんどん多様化していく子どもたちを前に、「変わらなくてはならないもの」もたくさんあります。私はそれらを変えていくための力がほしい。そのために、もっと視野を広げて、いろんな見方や考え方に触れたい。そうしてまずは、教師としての自分を変えたいと思ったのです。

この気持ちを忘れずに、大学院で学びに励んでいきます。2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/新宿区立牛込第三中学校

古賀 めぐみ (こが めぐみ)

新宿区立牛込第三中学校は牛込神楽坂駅、牛込柳町駅、神楽坂駅、市ヶ谷駅の各方面から徒歩圏内にある大銀杏が美しく咲く場所にあります。神楽坂は中央には毘沙門天善國寺があり、江戸中期には参詣客が多く訪れました。また明治には“山の手銀座”と呼ばれるほどの東京一の繁華街へと変貌を遂げ、尾崎紅葉、夏目漱石などの多くの文人や演劇人などが居住していて、文学や芸術などの文化も香る素敵な雰囲気のある街です。

私は牛込第三中学校へ赴任して早いもので7年目となりました。今回、福井大学での学びのスタート「三つの種」の作成のため、自分自身のことを振り返りましたが「音楽と共に過ごしてきた26年間だった」ということを実感しました。これまで勤務した品川区立八潮南中学校、大島町立第三中学校(伊豆大島)、板橋区立板橋第一中学校、台東区立桜橋中学校では本当に周りの人(先生方、保護者)に恵まれ、多くの方々に助けられながら教員生活を送ってきました。もちろん、何事もなく過ごしてきたわけではありま

せんが、何かがあった時に、支えてくれる先輩方、仲間がいてくれたことで乗り越えてこられたと思います。そして牛込第三中学校では、初めて教務主任を任され2年目となりましたが、これまで出会ってきた方々のように、先生方を支えられていない自分の無力さを痛感する日々です。音楽に対してなら「こうすれば、音楽がこう変化していく」という手法と結果まである程度見えてくるのですが、教務主任としては手法も結果も自信がなく、「こうしましょう」と力強く言葉にできない自分がいます。今回、大好きな音楽でも、学びたいと思っていた特別支援でもなく、福井大学の教職開発研究科のミドルリーダー養成コースを選択した理由がここに 있습니다。「誰かのために何かをする。誰かが笑顔になってくれる」ことが大好きで音楽を続けてきました。大学の時には専攻の声楽だけでなく、音楽療法で高齢者の方々と共に歌ったり、演奏したり、教師の職に就いてからは合唱や吹奏楽の演奏で、子どもたちや保護者、地域の方々が笑顔になったり、涙したりする、そんな時に幸せを感じて

きました。音楽を通して人に喜んでもらうことがとても大好きで、これからも続けていきたいと思っています。しかし、教務主任という立場で先生方と関わる中で、違う思いも湧いてきました。どうしたら先生たちが笑顔で働けるのか、もっと時間を有効に使い、子どもたちとも関わるができるのか、今の自分にできることは何か…。音楽では自信をもって答えられるのに、学校運営に関わる教務主任として先生方に答えられない（応えられない）そんな自分を変えていきたいと思っています。

4月カンファレンスの2日間で担当の先生方、共に学ぶ院生の皆さんの言葉を聞かされた時に、自分自身を振り返り、自分の内面をさらけ出し見つめていく場面が何度もありました。学校改革の前に自分の意識

改革が必要なのだと思います。セッションを行いました。また、この2日間での学びを通して、自分が積み上げてきたもの、揺るがない思いを振り返る機会ともなり、音楽と同様「共に創り上げる喜び」を職場の先生方とも味わいたいと思いました。そのためにも、まずは自分の意識改革を行うこと、職場において生徒も先生も共に笑顔で学校生活を送れるようにするため、それを阻む要因がどこにあるのか、改善するために魅力的な三中の先生方の力をどのように発揮してもらえば良いのか模索しながら2年間を過ごしていきたいと思っています。

多くの先生方との対話が楽しみです。よろしくお願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/沖縄県宮古島市立久松中学校

下地 研範（しもじ あきのり）

皆様、はじめまして。今年度より、福井大学連合教職大学院に入学しました下地研範と申します。所属は、ミドルリーダー養成コースです。私は教師になる前は、教育とは全く関わりのない化学業界の触媒メーカーに勤めていました。そもそもなぜすぐに教師にならなかったかといいますと、大学時代、周囲の友人たちが当たり前のように理系の職種に就職活動をする中、私は教師の道に進むか、学んできた化学に係る道に進むか非常に迷っていたからです。性格的に欲張りな私は両方できる方法はないのかと真剣に考えてもいました。冷静に考えたら無理な話なのは明らかなのですが。悩みに悩んだ末、化学業界の道に進みました。

前職にはまったく不満もなく、充実した毎日を過ごしていましたが、30歳を目の前にして自分の将来をふと考えたとき、やはり教師になって子供たちに学びの楽しさを教えたいと思いました。一度決めたら即行動。妻の理解と協力もあり、翌年には中学校の教壇に立っていました。

その日から早10年。私が授業づくりにおいて特に大切にしていることは対話です。生徒同士の何気ないやりとりや、学習課題に取り組む中で意見を交流し議論し合うことで、学んで得た知識と知識がつながっていったり、広がっていくと考えるからです。そのためには、やはり生徒自身に問いを持たせるような手立てや工夫が必要であると感じます。

最近、帰宅すると子供たちが何やら騒いでいました。

「なんで、空は寒いのか？太陽に近づくから熱いはずでしょ」

「空気がないからだよ」

「なんで空気がないと寒いわけ？意味分からん」

「確かに何でかな」

2人の真剣なやりとりに面白さを感じつつ、やはり授業においてもこの「何で？」を学びにつなげていけたら、きっと学びの楽しさを教えることができるのではないかと感じた瞬間でした。

最後に、現在のお話を致します。私は、久松中学校に勤務し、理科を担当しています。生徒数は163名。宮古島においては中規模校になります。毎年、自身の目標を設定し研究実践に取り組んでまいりました。昨年度は、「思考力、判断力、表現力等」の育成を図る理科の授業の工夫～「理科の見方・考え方」を働かせた対話的な活動を通して～をテーマに九州地区理科研究大会・佐賀大会にて研究実践報告を致しました。また、国立教育政策研究所の学力調査官と連携し、宮古島チームをつくり、地域素材（宮古島の地下ダム）を活用した理科の授業づくりの実践を行いました。毎年、さまざまな実践に取り組むものの、まだまだ学

びや経験が足りないと自分の未熟さを痛感しています。自身の成長のためには、井の中の蛙になるのではなく、外へ出て行く必要があると感じます。全国の先生方と対話し、経験から学び、専門性を高めていくために教職大学院で学びを深め成長していきたいと強く願っています。教職大学院の2年間を通して、これまでの教育実践をふり振り返り宮古島の児童・生徒の確かな学力をはぐくみ、未来の担い手として時代に対応できる主体性・創造性・国際性に溢れる人材の育成に携わっていきたく考えています。どうぞ宜しくお願い致します。

ミドルリーダー養成コース1年/福井市安居中学校

竹内 恭平 (たけうち きょうへい)

今年度ご縁があって、教職大学院でお世話になります、竹内恭平と申します。

現在、私は福井市安居中学校で研究主任をしていますが、本校は1小1中で全校生徒59名、教職員も10名程度と、限定的で小さなコミュニティになりがちです。研究会においては、授業について同教科での議論ができない状況の中、いつも教職大学院の先生方には貴重なアドバイスをたくさんいただくなど、大変お世話になっていました。これから大学院では、大学の先生方だけではなく、保・幼・小・中・高など様々な学校種の先生方やストレートマスターの院生の方など、多様な方々と探究し、学びを深めていけるので、とても楽しみにしています。

4月カンファレンスの「三つの種」でも話したのですが、これまでの自分の実践を振り返ってみると、数

学の「コンテンツ」の習得ではなく、どのように考えたのかの「プロセス」、あるいは「コンピテンシー」を大事にして授業をしていたように思います。本校に異動してからは、「Agency」に出会い、より一般的なコンピテンシーの1つであるAgencyの育成のために数学教育に何ができるか、そして、教科等横断の取組にも関心をもつようになりました。Agencyに挑戦することを研究の中核に据えたとき、分からないことも多く、様々な経験や信念をもった先生方といかに協働して研究していくかを悩んでいる日々です。

初めのカンファレンスで改めて感じたのは、「学びの相似形」と「Less is more」を意識することの大切さです。また、ポジティブに楽しんでやっていきたいと思っています。これからどうぞよろしくお願い致します。

ミドルリーダー養成コース1年/福井佼成幼稚園

谷山 麻紀 (たにやま まき)

はじめまして。今年度から福井大学教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学しました、谷山麻紀と申します。よろしくお願いいたします。

私は明確に「保育園の先生になりたい」と思ったことはなく、周りに勧められるままなんとなく保育士という職に就きました。保育士になりたての頃は子どもとのふれあいは楽しいと思うものの、その他の業務の多さや先輩の厳しさに涙することもあり、ここまで長くこの職を続けるとは思っていませんでした。

そんな私が保育という仕事を「楽しい」と思えるようになったのは、自分でクラス運営をするようになってからです。子どもたちの「やってみたい」と私の「やってみたい」を実現しようと奮闘する毎日が、やりがいになっていきました。子どもと共に成長しているという感じで、失敗も経験のうちと頑張っていました。

自分のやりたい保育を追求していくと、ハード面や他の職員との問題で叶わないことも多く、職場を変えるという選択をすることになりました。そこで出会ったのが現在の職場『佼成幼稚園』です。常に最新の保育を追い求める園長のもと、新しいことに抵抗のない職員が集まっていて毎日がとても刺激的です。

今回、教職大学院を受けることになったのは、未満児保育（0～2歳児）と以上児保育（3～5歳児）の間に起こる問題を相談したことがきっかけでした。園生活でのびのびと育ってきた子どもたちが、就学により長時間の座学を要求されたり時間に縛られたりする就学問題と同じようなことが自園でも起こっていると感じていました。未満児保育で主体性を大

事にのびのびと育ってきた子どもたちが、以上児になり、線に並ぶよう要求されたり一斉に活動したり。就学に向けて少しずつ集団行動ができるようになることは大切ですが、それは3歳児に求められる姿ではないと思いました。そのことを園長に相談すると、『ゆるやかな集団化』について大学院で研究してみないかと言われました。初めは戸惑いもありましたが、良い経験になると思い、挑戦してみることにしました。

今現在、私は3歳児クラス（22名）の担任で『ゆるやかな集団化』とはという問いに向き合いながら保育しています。集団生活の中でも自分の空間が確保されるような環境として、あえて死角を作り子どもたちがホッと安心できる場を作ったり、自分のクラスに固執し過ぎないように午後からの自由遊びの時間には、クラスの枠を取り3つのクラスを自由に行き来できるようにしたりしています。

いろいろ工夫する中で1番の問題点だと思うことは、2歳児の時は4人いた担任が2人に減ってしまうことにより生活リズムを作ることが難しくなっていることです。新入園児は身の回りのことを自分ですること自体が初めての子も多く、ひとつひとつの行動に手をかけなくてははいけません。今はまだ4月だからと自分に言い聞かせ、焦ることなくクラス作りをしていくことができると良いなと思っています。

4月のカンファレンスでの語り合いで、環境作りのヒントを得られたことが嬉しく、これからの大学院での学びに期待が高まっています。いろいろな視点からのアドバイスやヒントを得ながら、自分の保育を見直し、子どもたちにとってよりよい保育が提供できるように頑張りたいです。

ミドルリーダー養成コース1年/長野県岡谷市立岡谷北部中学校

中野 晃宏 (なかの あきひろ)

はじめに・・・本年度よりミドルリーダー養成コースでお世話になります。中野晃宏です。よろしくお願いします。今は長野県民として生活しておりますが、私は生まれも育ちも大阪府で、奥さんが長野県出身ということもあり、その縁で長野県の教員をさせていただくこととなりました。普段の会話では関西弁は出ません。不思議なことに標準語の環境に身を置くと、自然と関西弁が出なくなってしまうのです。ですが、実家に帰ると自然と関西弁で話すことができます。一時期は、なんとか関西弁を貫いてみようと思ってもいましたが、耳からの情報や、環境は大きな影響をもっているのだなと肌で実感しながら日々生活しております。

教員になりたいと思ったきっかけ・・・私が教員になりたいと思ったきっかけは、昔から子どもが好きで、中学校の先生を見てきたことです。中学校の頃の担任の先生や関わってきた先生方もとても楽しそうに日々の生活を送っていました。その当時の先生たちのように、楽しく、子どもたちと一緒に作り上げる仕事に就ければなんと幸せだろうと思いました。そういったことがきっかけとしてあり、今教員として働いています。実際に教員となってみると、仕事内容については、やる内容が多岐にわたり、大変だと思ふこともたくさんあります。ですが、どんなに疲れていても、寝不足であっても、子どもたちを目の前にすると、自然と疲れを忘れて、活動できる不思議さがあります。そんな不思議な力をもつ子どもたちを目の前にがむしゃらに突き進み続け、気づけば今年で教員になってから10年という月日が流れておりました。

10年経ち、教職大学院との出会い・・・10年という月日で立場も変わり、昨年度から学校の研究に携わる機会が増えました。今までは、目の前にあることに対して、自分にできることを一生懸命やればそれでよかったのですが、今ではそれだけではいけなくなっている現状に直面しています。これがミドルリーダーという立場になりつつあるからなのか

と・・・そんな力もないのに、どうすればいいのか・・・自分だけでなく、学校全体でどのように力を合わせていけばいいのか・・・不安ばかりが私を襲ってきていました。あるとき校長先生から「自分の思いを伝えられていないのが課題としてある」という話をいただきました。そこから、今年度は対話を軸に研究を進めていけば、その課題とも繋がるのではないだろうかと考え、そのことについて話をしていると、校長先生から教職大学院のことを教えていただきました。ラウンドテーブルに参加したり、説明会で話を聞いたりしていく中で、対話を通して考えを深めていける環境にあること、自分自身のことだけでなく、学校のために活かせるようになることが今の私の不安や悩みと向き合い、還元できる場になると感じました。

教職大学院でのこれから・・・教職大学院では「①対話を取り入れた授業のあり方」「②お互いに高め合える教師の集団づくり」の2点について考えを深めていきたいと考えています。①では、生徒が自らの考えを広げ、深めていくためには対話が必要であると考えています。ですが、なかなか授業に対話を取り入れようと考えていても、やらされていると感じているためか、お互いに考えを伝え合うだけで、それが自分の考えに影響を及ぼすようになっていないというのが現状です。そこには、対話をして広げたり、深めたりする必要感がないことと、対話の仕方が身についていないからではないかと考えています。そこで、教職大学院では、自らの授業のあり方について考え、生徒が主体的に自らの考えを対話で広げ、深めていける授業のあり方について考えたいと思っています。対話の必要感のある授業とはどんな授業か。対話をしやすい環境(座席の配置や対話のルール、ファシリテーターの育成など?)とはどのような環境なのかを様々な先生方との対話や、過去の文献などから分析したり、実際に授業で実践しながら検証したりして、深めていきたいと考えています。②では、学校内で授業研究をすることはあるが、教員同士で授業を改善するために話し合ったり、考えを共有したりす

ることができていない現状にあります。一人でも授業を改善するためにできることはあるとは思いますが、教員同士が互いに協働し合うことで、例年どおりでは見つけることのできなかつた新しい視点を手に入れたり、考えを深めたりすることにつながっていると思います。教員同士が必然性をもって協働し合える集団づくりのためにどのようなプロセスを積み上

げていったり、サイクルを生み出していったりすることが必要であるのか。よい手段であるのかを様々な先生方の考えや過去の文献等から考え、深めていきたいと考えています。教職大学院での生活を通して、以上のことを考え、生徒一人ひとりに還元できるそんな時間としたいと思います。これから、よろしくお願いいたします。

ミドルリーダー養成コース1年/長野県岡谷市立川岸小学校

横井 杏香 (よこい きょうか)

初めまして。今年度より、福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました。横井杏香と申します。現在、長野県岡谷市立川岸小学校で1年生の担任をしています。取得免許は、小学校教諭一種、幼稚園教諭一種、中学校教諭二種（英語）です。小学校教員として7年目となりました。

これまで働いてきて感じていることや私が本年度教職大学院で学ぶきっかけを記します。

教師1年目の時に、1年生の担任となりました。私が最初に所属した学校は生活科や総合的な学習に力を入れている学校でした。入学式から始めてで分からないことばかりの毎日。子どもたちとの話し合いを経て、学年2クラスでヤギを飼うことになりました。教師になりたての自分は、日々慣れないことばかりで子どもたちが毎日を無事に過ごしていくこととヤギが無事に育っていくことで手いっぱいでした。しかし、隣の学年主任の先生の学級では子どもたちが主体的にヤギに関わろうとしていました。それに、むやみに関わるだけでなく心を寄せながら大切にしていました。学年主任の先生はそのような子どもたちの姿を活かして、授業や学級づくりにも取り入れていました。何もできない自分と比較して、「どうやったらそんなことができるのだろう・・・」と見よう見まねで取り組む日々でした。そんな中、私の学級の生活科の公開授業がありました。指導の先生からヤギと私の学級の子どもの関わりを見て、「子どもたちがヤギに寄り添い温かく見守る、全体が一体と

なつてのめり込む姿があるといい」というご指導を受け、その時に“醸成”（学級全体が自然にヤギを育てよう守っていこうという一体感や気風を長い時間をかけて作り上げることが大切）という言葉を知りました。今でも活動やどの教科の授業も1つ1つを積み上げていくことの大切さを感じています。「研究授業があるから」や「誰かに見られているから」ではなく、子どもとの日々の生活が、今在る子どもの姿になることを実感させられました。“醸成”という言葉は今でも1年目の時に抱いていた悔しさや焦燥感と共に心に残っています。

また、その所属校の学校目標が“自己更新”という言葉でした。教師としての力量を高めるため、子どもたちと真剣に向き合おうとする先生、生活科や総合的な学習の時間でつぶやきや発言を引き出しながら子どもと共に作り上げる授業、多くの先生方から教師として在るべき姿を教えてくださいました。それからというもの、最初の1年間で感じたことや学んだことが、今の教師人生の軸となっています。

これまで受け持った学級の子どもたちから学んだこともたくさんあります。中でも、教師として転機となった今でも忘れられない出会いがあります。学校の異動後、初めての3年生担任になりました。緊張や不安もある中、出会ったAさん。Aさんとの関係作りが難しく、その上、学級づくりも悩む日々でした。自分としてはひたすらAさんと向き合った1年間でしたが、最後まで心を通わせることはできなかった

ように思います。「あの時の A さんやクラスの子たちにこうしてあげたかった」「これから教師としてもやり続けていけるのか」と、様々な悔いや不安を残しました。教師になって 1 番の大きな挫折でした。次の年、2 年生の担任となりました。目標は「A さんやあの時のクラスの子にできなかったことをすること」でした。生活科の研究授業を行う機会もあり、授業づくりについても取り組みました。周囲の先生方のお力もあり、今の自分が出来る精いっぱいのことを子どもたちと共に取り組むことができたと感じます。その年は、教師として働き続けていくための新たな目標も多くできました。しかし、今でも心に残るのは、

自分が何もできなかったあの時の A さんとクラスの子どもたちの姿です。

教職大学院に通う機会をいただき、これからも学び続ける教師になるために入学を決めました。これまで出会ってきた、自分を成長させてくれたり、立ち止まる機会を与えてくれたりした 1 人 1 人の子どもたちのことを心に留めておきながら、新しく出会う子どもたちがいきいきと学習したり安心して学校生活を送ったりすることができるように、日々学んでいきたいです。よろしくお願いします。

ミドルリーダー養成コース1年/福井県立勝山高等学校

Saeeda Ali (セイダ・アリー)

はじめまして。セイダと申します。勝山高校で働いています。トリニダード・トバゴからきました。皆さん、トリニダード・トバゴについてわかりますか？カリビアンで小さくて綺麗な国です。話したいことがたくさんありますが、この話のポイントは三つあります。一つ目は、小さい時に先生になろうとは思っていなかったということです。二つ目は新しい夢と続く道についてです。三つ目は、その新しい夢についてです。

ここから英語を使います。もし質問ありましたらいつでもお願いします。

I never wanted to be a teacher. I fought against the throng of educators in my family who assessed my degree in Literature and Linguistics and clamoured that I could only be a teacher with the claim that I would be a writer instead.

This declaration led me to a 5-year freelancer writer stint before I embarked on a journalism internship. As highly as I regarded the experience, it made me realise that my love for writing would eventually become corrupted if I followed that path. I knew the alternative was to risk my writing falling to the sidelines, but it was the only way I

could keep it safe. While I let that happen, I discovered something else instead.

Do you know the feeling of something being completely right for you? I only began to teach when the pandemic left me in desperate need of income. Suddenly, I was looking forward to every day, throwing myself into research on making effective lessons, and one day realised I had 3 TEFL certificates. Since I was a child, my gaze had been focused on what lay beyond my country's borders, and for the first time since graduating University, it felt like my life was falling into place.

Yet, when I was accepted to the JET Programme, my struggles were far from over. Coming to Japan fulfilled my lifelong dreams – living abroad, living alone, living in a non-English country, and the recent TEFL dream. Yet when I entered the Japanese education system, I realised how much I didn't know, and how desperately I wanted to excel here. Without my fellow teaching friends and beacons of light Shana and Sakai sensei, I never would have been able to bring my goals to fruition nor been as driven toward professional growth as I have been. And so, after about a year of teaching here, I began developing my perspective of teaching and learning.

I know all too well that it's difficult to learn a foreign language when there's no real need for it. In my English-speaking country, my high school French teacher was a terrifying and compelling woman who crafted an otherworldly French environment in the classroom that influenced the international life I now live. This helped fill my life with wonder and meaning. I want to create such a magical space for students through English (without the terror). Learning another language well unconsciously teaches good communication skills. Even if my students

don't remember English, I hope my classes are engaging enough that they learn how to communicate with different people, and to open their awareness to the wonders of the world we all share.

My life has been made more wonderful by understanding and capable teachers. Through this graduate programme, I shall work to become such an educator.

2年間、どうぞよろしく願います。

ミドルリーダー養成コース1年/大野市教育委員会

Caleb Dykens (ケイレブ・ダイケンス)

Hello, nice to meet you. My name is Caleb Dykens. I'm an American from the state of Massachusetts. I've been living in Japan for 8 years and plan to be here for at least 2 more. I'm an elementary school Assistant Language Teacher (ALT) for the city of Ono in Fukui Prefecture. I teach English at all the elementary schools in Ono. I began teaching in October of 2021. Before becoming an ALT, I attended college at Keene State University in the USA before coming to Japan as an exchange student. While in Japan I studied at Kansai International Language School (関西外国語大学) in Osaka. After one year I made a full transfer to Kyoto's Ritsumeikan University (立命館大学) to study International Relations.

My hobbies include 5km and 10km runs and long walks through Japan's wonderfully green nature. I am a big fan of working with computers and learning about new technologies. After work I often relax by playing video games or watching movies. I enjoy reading fantasy and science fiction books too. Recently I've been reading the Dune series. I highly recommend them so far! I would like to travel throughout Europe and maybe even live there in the future. If I could learn any language, besides English and Japanese, I would like to be fluent in German.

I gained my first experience teaching English by working part-time as a cram-school teacher in Kyoto. I

taught a large variety of ages and subjects while working there. I gained experience working with young children, test-prepping students, and many older customers practicing conversational English. After graduation, I returned to America and applied to the Japan Exchange and Teaching (JET) Programme. I received the position and was placed in a rural part of Fukui Prefecture.

As an ALT in a rural part of Japan, the schools I visit range from 30 student classes to 3 student classes. I enjoy the challenge of needing to prepare for different classroom environments. Large classes tend to be noisier but provide a wider variety of unique answers to our 'small talk' questions. Small classes allow the teachers to better acknowledge the pace that each child needs to fully understand the lesson and allow for a sufficient amount of participation.

I've also had to opportunity to lead the English classes as several of my schools. Learning how to make lesson plans by communication with my co-teachers has been a pleasant experience and inspired me to seek the Fukui University Graduate School for a more formal education. I hope to use this teaching course to learn from my fellow teachers who have more years of experience than me. I would like to gain a better understanding of how to mingle entertainment and education to ensure that my students

have a positive impression of English. As an elementary school teacher, I'm curious about how to get kids interested in learning about the world while setting them up for success in the difficult test-filled school years ahead of them.

In the future my dream is to be a professor teaching English or International Studies outside of America. I was

greatly inspired by many of my wonderful teachers at Ritsumeikan. Creating an international atmosphere that promotes conversation and understanding is a dream that I have. The world is too exciting to stay in one country forever and I want to help inspire the coming generations to explore what is out there.

ミドルリーダー養成コース1年/福井県立若狭高等学校

Catherine Buchanan Leigh (キャスリン・ブキャナン・リー)

Hello there! My name is Catherine Buchanan. It is very nice to meet you!

I am an Assistant Language Teacher (ALT) from South Africa based in Obama City. I like to be active and spend lots of time outdoors doing different activities like playing sports, hiking or just going to the beach. The two great loves of my life are "Coffee" and "Books". I love reading books and spend hours looking for the perfect book to read. I fully believed that one day I would pursue my love of "Books" and go into a career in Literature. In University I majored in English Literacy and Psychology. But then while still studying, I got a part-time job opportunity as an assistant teacher which changed everything. It was at a small farm school in rural South Africa and the number of students were few but it was a diverse mix of languages and cultures. I fell in love with teaching and decided then that I wanted to pursue a career in Education in the future. I was happy teaching at this school until I met "Hanako-san". She was a Japanese mother with children that attended the school. She was always the first to volunteer to help out at the school and was happy to plan events to share the Japanese culture. She was an inspiration to me and many other people at the school. She inspired me to pursue being an Educator and travel the world. I arrived in Japan three years ago and

since then I have been teaching English in a Senior High School. The level of English and the attitude towards English varies from student to student, some of the students have incredibly high levels of English and are deeply passionate about learning more while some have a lower level and are ambivalent to English in general. But despite all this, they all still try to communicate and use English to express themselves in and outside the classroom. Working with the students has been enriching as I have come to know the students personally and learn about the localized culture of the different Japanese towns. Furthermore, I have had to constantly assess what I know about my own Culture and Language in order to better share it with the students and it has given me a new perspective on many things. Teaching the students has also been a challenge as the lead teacher in the classroom as it is necessary to create and plan lessons that would accommodate the different levels of students while still providing them with content to further promote in their language learning. The other teachers at my school have been very supportive and are always willing to provide feedback. They have helped me grow a lot as a teacher. But, it is a process. I would like to further improve my method and skill in this Graduate Program to better become an educator who can support and inspire students to learn further in the future.

ミドルリーダー養成コース1年/越前市武生第一中学校

Tiago Pereira dos Santos (ペレイラ・ドス・サントス・チアゴ)

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学したチアゴと申します。2017年から県内の越前市で外国籍児童生徒の日本語指導をしています。現在、武生第一中学校に所属しており、市内の諸小中学校を巡回し外国人児童生徒に就学時のことば指導を主に行っています。また、教科学習支援や外国人保護者の対応(翻訳・通訳)も行っています。

出身はブラジルのサンパウロ州で、ちょうど10年前の2014年4月に来日しました。母国語はポルトガル語ですが、少し英語と日本語もできます。日本語は10年ほど前から勉強しはじめ、福井に住み続けているため、ようやく話せるようになりました。英語に関してはどこで習ったかよくわかりません(笑)。真剣な英語学習や留学の経験はありませんし、英語圏に一度も行ったことがありませんが、機会があれば遊びにだけでもいろんな国へぜひ行ってみたいと思います。

小学生の頃から外国に暮らしてみたいという夢があり、最初はカナダに行きたかったのはよく覚えています。ブラジルの熱帯の暑さが苦手で、カナダは雪がたくさん降り寒い国というイメージがあったから、とりあえずそこに行ってみたかったです。旅行だけでなく、カナダに引っ越し実際にその国の暮らし方を体験することが私の夢でした。残念ながら子供のうちにその夢をかなえることができませんでした。大人になってもずっと心の中に外国に行きたいという思いがありました。

高校3年生のとき、週に36時間のアルバイトをしていて、大学や進路について考える余裕がなかったため、入学試験を受けませんでした。卒業後は仕事を辞め、サンパウロ大学が提供していた経済的困難な学生のための受験対策教室に入りました。そこでいろんな人と大学の世界に触れ合いながら一年間勉強し、自分の進路について考えることができました。しかし、専攻科目を選ぶ際にはすごく悩みました。興味

のあることを考えたら、デザインスクールや国際関係学専攻などを考慮に入れました。

高校生のときもそうだったが、受験対策教室の友達と放課後などに集まって一緒に勉強することがよくあり、いろんな人に「チアゴの教え方が分かりやすい」と言われました。それをきっかけに、教員という選択を出願数日前から考え始めました。学校の勉強の中で、好きで得意だったのは数学と英語でした。教員になるのなら、そのうちのどちらかにすべきだと考え、一番楽しそうなものを選びました。やがて、2009年にサンパウロ大学の数学部に入学しました！

数学の勉強をはじめ、大学の生活はすごく楽しかったです。毎日新しい出会いがあり、学界に触れ合うことがとてもワクワクでした。キャンパス内の寮に住んでいた私は他学科の人とたくさん交流する機会がありました。そこで語学部の生徒達がやっていた言語体験講座のことを耳にしました。スペイン語からアラビア語に至るまで様々な言語があり、すごいなと思って、6ヵ月間のフランス語コースに参加してみました。まったく新しい言語の勉強が面白すぎて語学にハマってしまいました。そのあとドイツ語も2年間勉強しました。

大学生になって留学できたらいいなと思っていましたが、また2年生のとき公務員として就職し、学校に通いながらのフルタイム仕事勤務や家庭の事情により留学のチャンスを逃してしまいました。ドイツ語を勉強して大学を卒業したらドイツへ教育の研究に行く企画をしていたところ、日本で働くオファーがありました。日本の派遣会社が、福井県にある工場で働く人をブラジルで募集していました。仕事の内容は学習した専攻と全く関係ないことにも関わらず、長期間外国に暮らせる貴重なチャンスだと思って数学や教師のキャリアを一旦やめて日本に来ることにしました。

日本の生活は最初から気に入り、毎日充実感がありました。観光で都会に行ったりするのはもちろん、そして福井での暮らしもととても楽しかったです。ご飯もおいしいし、自然もきれいだし、そして自分の国と比べてすごく治安がいい国だなと感動しました。ブラジルから見ると地球の真裏で、まさかここまで来るとは思いませんでした。日本のことがだんだん好きになりました。ただし、工場の仕事に向いてなくて、3年目で退社しました。

日本語を教えて頂いた先生の紹介で越前市教育委員会の職員になり、武生南小学校で外国籍児童生徒の支援をすることになりました。そして2年目より立場が変わり、市内の小学校と中学校を巡回して外

国人生徒の日本語指導を担当することになりました。仕事ではブラジル国籍をはじめ、様々な国から来日した児童の初期段階日本語指導を中心に越前市に暮らす外国につながる家庭のサポートをして、ある意味で日本と世界の架け橋という役割をしています。

教員の経験が短く、かつ日本語指導員としての経験がないままこの仕事に就くことになりました。この連合教職大学院では福井大学の先生方や先輩方、そしてカンファレンスなどで出会う方々と色々語り合いながら共に学び、自身の実践を振り返り改善していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

昨年の振り返りと今後の展望

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属特別支援学校

笹本 穰太郎

この大学院での自分の学びの中心となっているインターンシップや金曜カンファレンスでは、毎回多くの気付きがある。 昨年は、福井大学教育学部附属特別支援学校にインターンシップに行かせていただいた。今振り返れば、ちょうど一年前は、インターンシップへ行くも、わからないことが多すぎて、戸惑いの連続であったことを思い出す。授業に対する見方や考え方、生徒支援の在り方など、果たして何が正解なのか全く分からない状態で日々過ごしていた。しかし、先生方や周りの院生と会話していく中で、自分の考えも徐々に変わっていったのである。最初の頃は、例えば、生徒支援では、ルールを破った子どもたちに、その行動について注意すれば良いという安易な考えであった。しかし、それは本当の支援ではない

のではないかと思うようになった。もちろん、マナーやルールを破る子どもを注意することは大きなことであるが、なぜその行動がいけないのかということ、支援の中で気付かせることが重要であることが分かった。また、その指導によって子どもがどのように成長してほしいのかを考えることも必要であるということである。

また、授業に関しても同じである。その授業や単元を通して、子どもたちにどのような姿になってほしいのかを明確にすることが授業づくりをしていく上で重要であるということである。インターンシップへ行くまでは、子どもたちの姿まで意識して授業を作ったことはなかった。とりあえず子どもたちが主体となるような授業を作り、それを実践していこ

うという考えであった。このように、たくさんのことを学んだ上で行った授業実践であるが、自分の思い描く授業が全くできず、失敗だらけの実践となってしまった。授業でのクラスの雰囲気も重く、子どもたちが戸惑う場面が多々見られた。また、内容に深まりがなく、子どもたちはさらにレベルの高い授業を求めている、そんな雰囲気であった。そこで、自分の実践を振り返った時に、失敗した一番の原因は、その単元を通して、「子どもたちがどのような姿になってほしいのか」という部分がぶれていたことであるということに気付いた。そのため、目標に向かって、授業を進めていかなければならないにも関わらず、目標がぶれているがために、結局その授業の中で何を学ばせたいのか分からないという、とても深まりのない授業になってしまった。このように学び続けた1年目はあっという間に時間が過ぎ、2年目となった現在、インターンシップでは、引き続き福井大学教育学部附属特別支援学校へ行かせていただくことになった。現在、高等部に所属しているが、高等部は今後成長していく上で、とても重要時期であろう。特に、人間関係に関しては、目を配っていかなければいけないと考えている。どれだけ子どもたちの変化に気づき、どうすればよい方向に導くことができるかを常に考えていかなければいけない。しかし、この変化に気付く

ためには、日々どれだけ、1人1人の子どもを観察し、その子どもの特徴をつかめるかが大事になってくるのではないかと思う。

インターンシップ以外に、大学院の金曜カンファレンスでは、今年からM2として運営に携わっていくことになった。今までは先輩の作ってきたカンファレンスに沿って学んでいったが、今年は自分たちでどのような学びを作っていくかを考えていかなければならない。金曜カンファレンスのカリキュラムを考えていくことは、今後、教員になっても役に立つと考えられるため、他の院生や大学の先生とも協働しながら作っていききたい。まとめてみるとインターンシップも金曜カンファレンスも協働が重要なポイントであると思う。インターンシップでもメンターの先生や中学部の先生方と話をしながら授業や個別学習を作っていくことがよりよい子どもの学びを作っていくことになる。金曜カンファレンスも院生や大学の先生方と協働していくことで、より良いカンファレンスのデザインが作られていくと思う。自分1人で考えるだけではなく、自分の考えを他者と語り合ったり、他者の考えを聞いたりしていくことが、教員としての資質能力を高めていくことにもつながると考えて、今後も学び続けていきたいと思う。

挑戦する1年に

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立丸岡高等学校 杉本 彩綺

教職大学院の生活も2年目になった。インターンは昨年同様丸岡高校に行っているため、引き続き活動していることが多い中で変わったこともある。担当の学年が、3月に卒業した3年生から今年入学した1年生になり、それに伴って3年生にいろいろ聞いていた実習生感のある生活から、1年生に教える先生に近い生活になった。また、今年から部活動に参加させてもらうことになった。

昨年度と比べて自分の中で最も変わったことは、インターンでの大切にしたいことや目的が明確になったことである。入学当初から、ある程度何がしたいかの目標はあったが、インターン生の立ち回り方、活動方法など分からないことが多く、また、どこまで何をしたいのかも分からないため、インターン校では受け身に回ることが多かった。しかし、1年間インターン生の在り方について悩みながらも、常に自分が今大切にしたいことを考え続けてきた。また、頭の中だけで考えるのではなく、金曜カンファレンスで悩

みや考えを人に話すこと、人から意見をもらうこと、紙に自分の意見をまとめることで自分の考えを形にしてきた。そのおかげか、今年度はより明確な目標を持ってインターンの活動を行うことができています。

そんな今年度の目標の一つが「様々なことにチャレンジすること」である。大学院生としての最後の年、そして来年からの教員人生のために、昨年度まで受け身だった自分から脱却したいと思う。その行動の一つが、部活動への参加である。昨年度から参加したいとは思っていたが、今年度から顧問が替わることになり、正直言うと参加することを渋りそうになっていた。しかし、これからの教員人生で部活動を少しでもしていきたい思いや、昨年度の生徒たちや自分自身の探究活動を通して探究活動のヒントが部活動にあるのではないかと感じそのヒントを見つけたい思いから、部活動に参観することにした。部活動は、男子バドミントン部を見ることになった。丸岡高校には女子バドミントン部がない。だが、私自身が小学校から中学校、そして大学でバドミントン部に所属していたことから自分の経験を活かすことができるバドミントンがしたかったため、参加させてもらうことにした。はじめは、生徒たちの様子から、生徒自身で考える様子をじっくり見ていきたいと考えていた。しかし、部活を見るからにはやはりそれだけでは

いけない。生徒たちにどう声をかけるか、技術的な指導はどこまで言うべきなのかなど、自分が考えもしていなかった悩みが増えることになってしまった。もう一つ、必然的に挑戦することになった問題もある。それは、授業実践をするクラスと担当しているクラスが違ふことで、より多くの生徒を理解しなくてはならない状況になったことである。昨年度は、自分が1年間担当するクラスで授業実践をしていた。そのため、授業実践の際には、生徒理解や関わり方を気にすることなく実践していた。しかし、今年度は生徒と関われる時間が昨年度の半分にも満たないクラスでの授業実践となる。担当クラスと授業実践のクラス、どちらのクラスの生徒もよく理解しなければならぬ状況となってしまった。現職の教員になってからは当たり前のことかもしれないが、人の名前を覚えることが苦手な私にとっては大きな悩みであり、初めての挑戦になる。

新しい試みには常に悩みがつきものであることを改めて感じた。しかし、挑戦することと悩み続けることは、どちらも学び続ける教員であるために大切なことだと思う。悩むことが増えても一つずつ答えを見つけ、大学院生として最後のこの1年間は様々なことに挑戦したいと思う。

新たに始まる

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属特別支援学校

村上 瑠菜

新年度になり、気づけばもう1か月が過ぎた。インターン先や所属するクラスは昨年度と変えなかった。特に、所属するクラスはどうするのか最初の1週間はとても悩んだが、いろいろな学校の先生とも話をし、昨年度とクラスを変えなかった。その話をする中で、「インターンとは？」という私の認識と学校側の認識が違っていることがわかった。学校側の認識としては、私の指導は基本的に大学が行い、実践す

る場を提供していればよいと思っていたようだ。これまでのインターン生は先生と一緒に授業を作っていく、記録も読んでもらっていた。昨年度の私の様子では一度メンターの先生に記録を見せてからそれ以上見せるということはなかった。インターン生の担当は今年度も教務の先生になったが、どうしても学部の状況が分からずに記録を見てもらうのも申し訳ないし、やりづらさを感じていた。そこで記録を学部

の先生に見てもらいたいこと、一緒に授業を作って
いってほしいことを伝えた。

昨年度にもメンターの先生とお話しをするのはやり
づらいと思っていたが、学部の状況を考えると、やり
づらいということを言い出せなかった。金曜カン
ファレンスで、他のインターン生と話をしていると、
みんなは“メンターの先生と話をして”と密に話をし
てそこから自分の考えを作っている様子だったところ
と、私の現状を考えた時にあまりにも違っていたこと
がしんどかったことを思い出した。おかしいと思っ
ていてもどうすることもできなかった。今回学部代
表に話をし、インターンとは本来どうあるべきか
掴んでもらったのは私の中では大きかったと思う。
少しでも昨年度よりもいい環境でインターンをや
っていききたいと思っている。

昨年度一緒に実践をした生徒は高等部に進学し、
たまに会うくらいになった。他の高等部に進学した
生徒にもたまに会っている。少しの時間ではあるが、
お話しすることが私の楽しみの1つになっている。
昨年度主に関わった生徒は、4月に私と会うと恥ず
かしいと言い、教室のドアに隠れていた。その後下
校時に話をすると、その生徒から「私のこと覚えて
る？」と聞いてきた。私はもちろん覚えているため
覚えてることを伝え、これまでの様子に戻り、いつ
ものように話をした。この生徒の中で、私が忘れ
ているかもしれないと思っていたのかもしれないが、
なぜよそよそしかったのかわからない。この生徒
も新しい生活が始まったことによる環境の変化もあ
り、ま

だ落ち着かなかったのかしれないと思っている。
この生徒とは、月1回程度、全校縦割り集団の活
動に関わりながら、様子を追っていきたいと思っ
ている。

実践については、昨年度は数や言葉について取
組んでいき、今年度も引き続き取り組もうと思っ
ている。対象の生徒が変わるため、うまくつなげら
れることはつなげていきたいと思う。昨年度は課
題、クラスの活動と学部全体の活動を通してみてい
くことができなかった。そのため、今年度はゆう
ゆうタイム、グループくらし、クラスといったす
べての活動で同じになったため、活動間のつな
がりを見ていくことができると感じている。学
びの必然性やどこまでなぜそこまで狙ってい
くのか考えていきたい。昨年度は個別での実
践だったため、今年度は個別での実践に加えて、
クラスでの実践もやっていくことで、個と集団
と視点を昨年度よりも広げていきたいと思っ
ている。

金曜カンファレンスでは、立場が変わり運
営する側となった。ファシリテーションも毎
回やってきて、慣れないながら取り組んでい
る。始まったばかりなのでいろいろ模索しな
がらやっていきたい。会議は時間が限られて
いる中、みんなにとってどのような学びにな
るのか、どの方法を取るとよりよく検討し
ていけるのか試行錯誤している最中である。
まだ、どれがいいかはわからないがとりあ
えず試してみて、その都度どのようなやり
方がいいのか、みんなで考えてやってい
きたい。

金曜カンファレンスに対する自身の見方の変化

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

渡辺 昇希

私は教職大学院に入学してから3年目になる。3
年目に入って、インターンや金曜カンファレン
スに対する見方が変わってきたように感じる。
特に金曜カンファレンスである。2年目までは、金曜カンファ

レンスについて、私はあまり意義を感じてい
なかった。1年目は先輩の実践したことを聞
けば聞くほど自分が劣っているように感じ、
自信がなくなっていく。それゆえに当時の
私は金曜カンファレンスに出席し

たくなかった。2年目になると、私含めて2年生は金曜カンファレンスを運営する立場であったため、毎回自分のグループをファシリテートするのに必死であり、1週間分の学びを整理するなどと言ってもらえなかった。総じて、私は金曜カンファレンスを通して1週間を振り返ることも少なく、仮に金曜カンファレンスで印象に残ったことがあったとしても、学んだことを使うということもあまりなく、金曜カンファレンスへの意義を感じる事があまりなかった。

しかし、今年から福井商業高校で講師をするようになってから、金曜カンファレンスにおける私の意識も変わった気がする。授業をやってもうまいかない。そもそも私にとっての「うまくいった授業」とは何なのか、授業でこの教材を与えると、生徒の顔つきが変わった、どういう説明であれば生徒は分かってくれるのか…1日1日少しでも授業がうまくなりたから普段も、金曜カンファレンスでも自分の実践についての振り返ることが圧倒的に増えた。振り返ったことをグループで話すと、同じグループのメンバーや先生からフィードバックをもらえるので、自分が持っていた視点とは違った視点をもらえることもある。また同じグループ内のメンバーの実践を聞く中で、これは自分にも役に立つのではないかと考えたことを次の授業で即実践するようになった。また、金曜カンファレンスには学びの振り返り以外にも教育について、2年生が1年を通して決めたテーマについて資料を検討したり話し合う中で深めて

いくという時間がある。私はこれまでは自分に余裕もなく、あまり自分の中で意義を感じることができなかったもので、その時間は形だけ取り組むことが多かったのだが、3年生になり自分に余裕ができて真剣に取り組むになると、これまでの自分にとってインターンの在り方や教育観について見詰めなおすことができ、毎週取り組むごとに、次はこんなことに取り組んでみようかな、と思えるようになった。2年目までと違って金曜カンファレンスに対して意義を感じるようになった。私はこれまで金曜カンファレンスや月間カンファレンスに対してただただめんどくさいなと思っていたが、これからも少しずつ取り組むことへの価値を見出していきたいと思う。

私は金曜カンファレンスに対して少しずつ価値を感じつつあるが、それは2年生の存在があるからこそだと思う。毎週2年生が運営している、あるテーマについて資料を検討したり話し合う中で深めていくという時間があるが、配布されるレジュメ1つ1つが良く作られていて、2年生の一生懸命さを感じる。これは一部かもしれないが、私が授業を作るなどして夜遅くに院生室にいと少人数で集まって次の金曜カンファレンスの運営について話し合っている姿を時々目にする。そんな2年生に対して私は感謝しているし、彼らの努力が少しでも何らかの形で報われれば、とも思う。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

「対話」が可能性を拓く

ミドルリーダー養成コース2年/宮古島市立伊良部島小学校

儀間 裕勝

「大学院に行く意味はある？」と、しばしば懐疑的・否定的に聞かれることがある。毎月、宮古島から

東京まで、決して安くはない費用と往復10時間近い時間をかけて、カンファレンス等に参加する。見る人

によっては、莫大なコストをかけて、ただ教師同士で話し合いをしているだけに見えるのかもしれない。しかし、この教師同士の「対話」が、前年度の私の実践を支えてきた。たしかに、具体的な答えを教えてくれるものではないかもしれないが、カンファレンス等での対話を通して、新たな視点や気づきを得ることができた。また、さらに子ども達を輝かせられる実践が展開できるのではないかと考えることができた。一年間を通して、「対話」が私の実践へ向かうエネルギーとなり、様々な可能性を拓いてくれたと感じている。

本年度、期待に胸を膨らませていることがある。「教師同士で対話できる場」が、自校にできたのだ。教師同士が、協働的に学び合える場、難しい話でなくても、誰もが自由に参加でき、それぞれが抱えている課題等について話すことのできる場が作れないかと、前年度を通して模索していた。それは、教職大学院を志すきっかけとなった課題でもあった。それぞれの業務や時間的な課題などがあり、場づくりは、年度末の3月まで一切の進捗が見えなかった。実現不可能とさえ思えた。しかし、令和5年度も終わりが見えた3月末、先生方の力によって、驚くほど突然に「教師同士で対話できる場」ができたのである。それは、些細なきっかけからだった。

前年度末、異動が決まっていた校内研修担当の先生に、思いの丈を伝えた。「校内研修のなかですら、教師同士で対話する時間がないこと」、「隣学年でも、どんな実践に取り組んでいるのか見えてこないこと」「ほとんどの学年が単学級であり、各学年、教師が一人で課題を抱えている状態であること」などである。先生は、「私が、本校で3年間、どうにかしたいと思っていたけれど、できなかったことだ。」と受け止めてくださり、全体の場で、教師同士で対話できる場をつくることが提案された。そこで、若手の先生が、校内研への自身の取り組み方に課題を感じながら一年間過ごしてきたと話されたり、管理職の後押しもあ

って、月曜日の15時からの30分間、参加しても、参加しなくても自由として、教師同士で対話できる場「ゆんたく会 ～たまには参加してみようかなの会～（最も若手の先生が名付けた）」ができたのである。「ゆんたく」とは、肩肘張らずに、リラックスして話をするようなイメージを持った沖縄方言である。まだ数回の実施だが、ほとんど全員参加で会を行っている。また、本年度は、私が校内研修の担当となった。授業研究会等でも、教師同士の対話を促進できるように働きかけていきたいと考えている。

4学年担任としては、子ども達がいきいきと活動できるような、総合的な学習の時間における探究を実践していきたいと考えている。本年度、担任を努める4学年は、自校において、所謂「大変な学年」である。37名の単学級、言語・知的・情緒の3つ特別支援学級から7名が在籍し、その他にも支援員が関わる児童や暴言・暴力等の問題行動が見られる児童、落ち着いて座ってられない児童など、課題を持っている児童が多数見られる。朝、出勤した時点ですでにトラブルが起きているということも日常茶飯事だ。連動して、トラブルに関わる保護者からの声も多い。学習への取り組みにも課題があり、授業中に誰かが発する声や動きなどに連鎖的に反応していく様は、さながら原子炉が臨界に達する仕組みを表したモデルのようである。このような実態から、個々の児童の学びにどのように寄り添っていけば良いか試行錯誤の日々だ。探究を通して、協働的に課題に取り組むことを軸にして、互いの考えを認め合うことや学びに向かっていく姿勢などが育めればと考えている。

本年度の探究は、伊良部島の伝統的な産業であるカツオ漁と密接に関わる、島のカツオ節工場を訪ねるところからスタートしようと計画している。子ども達のどんな学びの姿が見られるか楽しみだ。

最後に、教職大学院での学びも2年目に突入し、長期実践研究報告をまとめなければならないというプレッシャーもあるが、教師としてはまだ道半ば、焦らずに実践に取り組んでいきたいと考えている。

Ch-Ch-Ch-Changes

ミドルリーダー養成コース2年/福井工業大学

Shana Wolf

Changes have been occurring in my professional life, giving me new experiences to bring into my second year in the DPDT. During my first year in the program, I had the pleasure of working as an assistant language teacher (ALT) for Fukui Prefecture. This year I have retired from that position and accepted a new one as an assistant professor at the university level. While my job has changed, I am seeing similarities to past experiences and applying my prior knowledge to my new position. I am excited to explore this professional change with the support of my fellow students, teachers, and DPDT staff.

I worked as an ALT for six and a half years. The position was my first introduction to English teaching in Japan. Over time, as I built up trust and skills as a teacher with the assistance of my wonderful JTEs, I was able to build confidence in my teaching and classroom management abilities. Eventually I became the most senior ALT in my area and a core member of the community of practice group we have established in Okuetsu (Katsuyama City and Ono City). During the first year of my time as a student in the DPDT I was inspired to bring new perspectives and activities to my lessons as an ALT. Furthermore, I thoroughly enjoy the team-teaching dynamic of being an ALT. The balance of responsibility with the homeroom teacher provided a level of security and a safe space within which I could grow, get feedback, and build my skills over time. However, I also came to realize that the security of an ALT position can be a double-edged sword, and in my own case I eventually reached a point where I felt like I had little control of my lessons in spite of my experience and increased lesson planning abilities.

I turned to face myself and knew I would have to change my current job to have freedom in the classroom as well as long-time career stability. I decided to find a new job. I am now an assistant professor, teaching university students as the sole instructor. The transition has been intimidating in some ways. Before starting, I wondered if I was able to be an effective teacher for my students. I have been teaching in my new position for only a month, but I feel that I am developing my practice with every class I teach. Initially I was wracked with nerves about my lessons. A month into the position I still get nervous in some classes,

but with the support of the staff of DPDT and the daily advice of my fellow professors I feel I am rapidly overcoming my anxieties.

I have been pleasantly surprised to find some similarities between my time as an ALT and a university professor. One of my observations transitioning from teaching junior high students to university is that students want to have fun. I have observed how engaged students are when they are given interactive activities that encourage them produce their original ideas. My focus for this year will be making classes in which students feel motivated and leave the lesson empowered with some additional knowledge about how to use English. University students are very busy with major classes, part time jobs, and busy club activity schedules. Making English a relevant, fun, and compelling part of their busy schedules challenges me to be continuously centering student needs, expectations, and abilities as I develop my lessons.

My idea for my long-term practice record has changed from the end of my M1 year. I now wish to make the practice record an asset for current ALTs and for ALTs or other teachers who plan to transition to another teaching position. During the six and a half years I was an ALT, I developed a plethora of tips and tricks to use while team-teaching in a classroom. I have been surprised to discover how flexible these teaching strategies have been in adapting to different levels and education contexts and show me the relevance of my ALT work to my current position. I am now living the transition from one work environment to a new one, so it is a perfect opportunity to document my experiences to aid others in their transitions.

The title of my newsletter is in reference to the David Bowie song, “Changes.” The song describes defying critics and reinventing oneself. I feel that it is especially relevant to this time of my life. I want to reflect the optimistic tone of the song and actively demonstrate facing the past in order to move forward in my practice. The practice record I will write will reflect my experiences summed up thus far in my career, with the aim to be of relevance to ALTs and any other teacher experiencing a career change.

人に寄り添うことの大切さを思う

学校改革マネジメントコース2年/横浜市教育委員会事務局教育課程推進室

丹羽 正昇

3月までは横浜市立東汲沢小学校の校長として勤務していましたが、この4月から、4年ぶりに教育委員会事務局で働くことになり、教育委員会事務局教育課程推進室というところに配属されました。実はこのセクションには、校長になる前にも所属していました。そのときは首席指導主事という立場でした。教育課程推進室の首席指導主事は、横浜市の学校教育や学校経営のコンサルテーションを担う170人いる指導主事のトップとして、学校支援の在り方を決める役割を与えられた結構やりがいのあるポジションでした。

今回は室長という役割です。教育課程推進室は、文字どおり横浜市の学校教育を推進していくセクションで、室長はその旗振り役といったところでしょうか。旗振り役というと、リーダーと訳される場合が多いと思います。皆さんは、リーダーと聞いてどのような像を思い描くでしょうか。カリスマ性を発揮してぐいぐい引っ張るタイプ。必要な指示を必要なときにだけ出して、あとはお任せというタイプ。自分がロールモデルとなり、そのあとをついてこさせようというタイプ。とにかく教えることに喜びを感じるタイプなど、様々に思い浮かぶことでしょう。私にも思い描くリーダー像があります。私が思い描くそのリーダー像は、校長職を経て培ったといっても過言ではありません。私の思い描いている世界をひけらかすのは、少し恥ずかしいのですが、せっかくの機会ですから思い切ってお話しさせていただきます。

私が思い描く、目指すリーダー像は、「サーバントリーダーシップ」というものでした。初めて聞いたという方もいらっしゃるかもしれません。サーバントリーダーシップをサーバントに着目し、そのままの意味で受け取れば、奉仕する支援型リーダーシップということです。サーバントリーダーシップは1970年代に、トップダウンで行うリーダーシップと

は一線を画するものとして提唱されました。皆さんをミスリードしないために、ここでいうサーバントのもつ意味を確認したいと思います。サーバントとは、リーダー自身が目標を達成するために、自らの意思で部下の支援に徹する状況を指します。

昨年度までの校長職の中では、組織を形成していく上で、このサーバントリーダーシップが、大きく学校経営に資するものになりました。職員の主体性を引き出し、自らが学校運営に参画するというカリキュラム・マネジメントの根幹をなす理念を具現化しただけでなく、いつしか職員同士がお互いを大切にする組織へと育っていったのです。経営者自身が人を大切にする姿勢を見せれば、自ずと職員もまねをしたということかと思います。人材育成・人材管理の面において、サーバントリーダーシップが力を発揮したということなのです。

人材管理というと、なんだか冷たいように思えるかもしれません。しかし、私はこの人材管理こそ学校経営の土台を形成すると考えているのです。校長職にある間、ずっと「学校づくり」という幅広い言葉では、実際の学校経営を捉えることは難しいと思っていました。その理由としては、学校とは人が人を育てる、または人がいて人が育つ環境だからということが挙げられます。分かりづらいでしょうが、とにかく言いたいのは、学校は人がつくっている。だから、学校をつくるには、とにかく人を大切にすることが肝要で、そのためには人の育成と管理が大事だという思いです。もう一つ解説しなければと思います。それは、「管理」という言葉の意味です。なんとなくよくないイメージをもっている方もいらっしゃるかもしれませんが、元来「管理」とは、よい状態であるように気を配ることを意味します。私は、この気を配るところに惹かれています。学校を経営するとは、

積極的に人に気を配り、とことん人に寄り添うことで成立すると思うからです。

人に気を配る。とことん人に寄り添う。これこそが、サーバントリーダーシップの基本です。NPO 法人日本サーバント・リーダーシップ協会の定義に基づく「サーバントリーダーシップに求められる 10 の特性」には、「傾聴、共感、癒し、気づき、説得、概念化、先見力、予見力、執事役、人々の成長に関わる、コミュニティづくり」が示されています。これら全てが人材育成・人材管理には必要だと思います。どれ一つ欠けても、私の学校経営はうまくいかなかったに違いありません。

今度は教育課程推進室長として、横浜市の学校教育、特にこれからの学校教育の在り方を具現化していくためにサーバントリーダーシップを発揮する必要があると思っています。もちろん学校教育そのものは、学校現場でしか展開しません。しかし、各学校が、走りながら自らを改革していくのは並大抵のことではありません。それでも学校は、子どものために挑戦し続けています。そういった学校の姿勢に教育委員会事務局がしっかりと寄り添い、伴走することで、新しい学びの具体的な姿が見えてくると思いま

す。その意味では、私が実現しなければならないサーバントリーダーシップは、職場で一緒に働く人たちに対してだけでなく、500 校を数える横浜市立の全ての学校に対しても発揮されなければなりません。そして、行政と学校が一体となり、開港の地である横浜の教育現場から、日本の学校教育を変えるという思いをもつことが大切だと思います。なんだか壮大で生意気なことを申し上げているようですが、そのような進取の気概こそが横浜のプライドであり、横浜ブランドなのです。

教職大学院での学びはラスト一年になりました。たくさんの人と出会い、たくさんのお話を伺い、自分自身を省察し、私の中に豊かな「溜め」をつくっていきたいと思います。その溜めを長期実践研究報告にまとめることで、私自身が豊かになることは間違いありません。それ以上に思っているのは、福井大学教職大学院での学びで得た溜めが、はまっ子（横浜市の子どもたちの愛称）の未来を創造する源になるのではないかということです。教育施策の創造に携わっている一人として、わくわくしている自分がいます。今年度もよろしくお願いいたします。

学びの場をデザインする

学校改革マネジメントコース2年/教職員支援機構

目見田 紋未

「私、いつも前日はわくわくしてしまうんです。今日は何が話せるだろう、何が学べるだろうととても楽しみで」

先日、教職員支援機構（NITS）の中で開催している、職員同士の学び合いの場（研修マネジメント力協働開発プログラム、通称「マネプロ」）で、同じグループになった方が言っていたこの言葉が印象的でした。自分の考えに向き合い、相手の考えを聞き合い、学びを深める時間は、いつもとても充実しています。私自身にとってその時間は、NITS の中で実施している「マネプロ」に加え、この教職大学院における月間

のカンファレンスの時間も、それに該当するんだろうなあと、あらためて思います。

福井大学教職大学院において、カンファレンス等に参加させていただく日々も 1 年を超えました。参加するたびに、外からの知識というよりも、自分の中の思いや、経験の振り返りの中に、いつも発見があるのが新鮮です。自分一人で日々仕事をしている中では気づかなかったり、あるいはちょっと目を逸らしていたり、暗黙知化してしまっていたりしていたことを、改めて意識化して捉えなおし、頭を良い意味でぐるぐると働かせながら帰りの新幹線に乗る日は、毎回とても充実しています。

そして同時に、いつも「このような学びの場には、一体どういう仕掛けがあるんだろう？」という目線でも、カンファレンスには参加しています。NITS の中で実施しているマネプロの企画においては、私が教職大学院のカンファレンス等で学んだり、体感したり、気づいたことを、沢山利用させていただいています。これまで教職大学院の先生方、そして院生の諸先輩方が作ってきた文化や、培ってきた教職大学院のスタイルを体感でき、それをすぐに持ち帰って実践して、同僚に感想を聞いて、次の展開を考えていける。そんな状況に身を置けているのはたいへん恵まれていると感じています。

先日行われた合同カンファレンスでは、2年目と1年目の院生が良い意味で情報共有をしたり、2年目の院生が体験や想いを語る中で、この「学びの場」の雰囲気や醸成し、伝えることができるような働きかけがされていました。特にファシリテーターの先生方の声かけからそう感じました。

実はNITSでは、職員の学び合いの場である「マネプロ」の2年目の展開について、少し心配の声があがっていました。「着任1年目で、これから考える立場の職員と、昨年1年間しっかり考えてきた職員の間のズレのようなものがある中で、学びの場は上手く作用するだろうか？」と。私はこの疑問に対して「多分大丈夫だと思います」と、(自分の教職大学院での1年の体感を通して)比較的気楽に答えていたのですが、4月に改めてカンファレンスの場に出席してみて、「2年目として参加する側はこんな気持ちになるんだ」という体感と、「グループ設定、ファシリテーターとしての声かけ、最初の説明の内容等、少しここを工夫して実施してみよう」という具体的な部

分の両方を持ち帰ることができ、あらためて「これで大丈夫だと思います」と実施することができました。結果的に、とても良い場を皆で作ることができたと思っています。このように、毎回のカンファレンスは、自分自身の学び・省察のために豊かに時間を使えるという点でも、実践に非常に具体的に作用させるという点でも、毎回得るものを沢山いただいています。

令和5年度の1年間、福井大学教職大学院における経験を活かしつつ、直接的に教職大学院の先生方にも大いに助けていただきながら、NITSでは「研修観の転換」に向けた様々な取組を実施してきました。その取組をしながら、職員皆で日々考えてきたことを整理したものは、今年の4月に出した「NITSからの提案」という文書の中でも纏めています。これらの取組や文書をきっかけに、今年に入った頃から、全国の研修担当者の方々と繋がり、ともに考える機会も多くいただけるようになりました。

展開が目まぐるしく変わっていき、「次はこれも考えなきゃ」「あれも頑張らなきゃ」と少し焦りが出ていたタイミングで、冒頭の言葉を聞きました。その言葉を聞いて、「自分たちがワクワクしながら考えられる時間が、様々な取り組み、展開の土壌になっている」「だからこそ、このような学びの場をどうデザインするかにしっかり向き合おう。そして、自分自身も楽しもう」と、を改めて思うことができた言葉でした。

これからの1年も、教職大学院での学びを大切にしつつ、NITSの、そして全国の教職員研修における学びの場を、もっとわくわくした、充実したものとしてデザインしていけるように、沢山考えていきたいと思っています。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

小さな一歩

学校改革マネジメントコース2年/法政大学中学高等学校 石川 秀和

●立ち止まってじっくり省察することの魅力にとりつかれた1年、大きな気づきを得ることができた●

「何だか本当に地味な実践だな・・・」授業を開いてくれる方の教室に必要なプリントを置きに向かう

際に思わず心の中でつぶやいてしまった心の声である。しなしながら、昨年度1年間の福井での学びで、日々の授業を省察し、教育活動を積み上げていくことこそが大切なことであるということを学ばせてもらった。カンファレンスやラウンドテーブル、集中講座などを通して様々な先生方と「対話」を重ねていく中で自身の実践を相対化し、新たな気づきを多く得ることができた。

多忙感にまみれた日常や厳しい教育情勢の中ではなかなかポジティブな思考に持つに到らなかったり、未来が見通せないことが多いが、教職大学院での様々な方々との出会いや対話を通してエンパワーされることが数多くあった。特に、自分自身が大学院で学んだことや気づいたこと、他の先生方のお話を伺う中で自然と「展望」を見出すことができるようになっていった。なかなか先の見出せない世の中において（実現が困難かもしれないけれど）「展望」を見出すこと自体が非常に素敵な営みであるように感じている。昨年度、同僚に「これからの展望はどう考えていますか」と対話をした際に「展望なんて見出せるわけがないじゃないですか！」と返答をもらうこともあった。職場はまだまだ困難をかかえている状況に変わりはないけれど、多忙な中でも一歩立ち止まって考えることによって自分たちの教育活動をじっくり省察することにつながり、これからの展望が見出せることやその営みの魅力について気づいてしまった自分としては、多くの同僚とこのことについて対話し、実践していきたいと思う。

昨年度、教職大学院での学びを通して、勤務校の課題の一つに学び合いの少なさを見出すことができた。具体的には、授業をひらく取り組みの必要性についてである。これからを生きる生徒たちにとって、経験則では無く、科学的な知恵や客観的な知見をもとに生徒自らが主体的に学んでいくことが大切な学びであり、そのような授業を実現するためである。

●授業をひらく取り組み事始め●

昨年度6月に福井での学びからヒントを得て教育実習期間中に2名の若手の先生に授業をひらいてもらい、それを複数で見させていただいた。「実習期間中なので・・・」というお題目をつけていたが、お互

いの授業を見合うというところにねらいがあった。授業を見学し、直後に短時間の振り返りの時間もたれた。実習生からは授業をつくるにあたって困っていることや考えている事が率直に出され、授業づくりの本質的な内容について対話することが可能となった。

このそよ風のようなささやかな取り組みの後、夏休みに、教職大学院の福島先生をお呼びして、ミニ学習会に取り組んだ。テーマは「子どもの見取り」についてである。日々忙しく仕事をしている私たちにとって、日々の実践について、立ち止まって考えたり、語り合うことの大切さを改めて実感することとなった。若手のAさんが「授業のことをこのように話すのははじめて」と語っていたのが印象的だった。

自校で実施する授業を見合う学び合いの他にもいくつかの学校の校内研修を見学させていただいた。授業をひらくことそのものについて学ぶ目的で参加したのだが、多くの学校で「どういったことを中心に見たいですか」「どんな授業を見学されたいですか」と問われるので、「とにかくひらいているところをみせてください」と伝えても、授業をひらくことそのものが当たり前の学校の先生方には上手く自分のねらいを伝えることができないもどかしさや自分の力量不足を感じた。それでも、気持ちよく研究協議会や討議の場に参加させていただいたことには感謝してもしきれないところである。

●授業をひらく実践にチャレンジ●

昨年度2学期、何とか授業をひらいてもよいと了解をいただいた方の力を借りてその方の授業をひらく取り組みにチャレンジすることとなった。しかしながら、実際に授業をひらいてみると、多くの課題があらわになり、失敗に終わってしまった。準備の細やかさに欠け、授業の中身そのものをしっかりと深めることにつながらなかったものとなってしまった。事前準備の課題として①事前の学年会との連携、②全体への周知、③生徒への周知④座席表⑤ビデオ撮影、などがあげられる。特に、授業を見せてもらう生徒に対して丁寧なひらくことの意図を伝えともに創っていく必要があったように感じている。リフレクションについても、授業者が「時間がない！」ということで、

ご本人がおられない中で実施しなければならない態が生じてしまった。「授業者であればもっとも気になるところだけれど、忙しくて参加できないということなどをどのように見るか」この点は、何のために授業をひらくのか、ということとも重なってくるように感じている。

本校ではこれまで歴史的に経験がなかった「授業をひらく」という事に挑んでくれた方のチャレンジを十二分に活かすことができなかった。私自身のマネジメントの課題として引き取らせてもらった。

●2024 年度すでに 3 名の若手の方に授業をひらいてもらうことを実現！！●

新たなチャレンジにつなげるために、昨年度 3 学期には、私学の大東学園の授業に何名かで見学に行ったり、トレーニングを兼ねて本校内で授業をひらく取り組みを行い、2 学期の実践の省察に努めた。

2 月 19 日の授業見学では「大東の先生方の生徒理解をしながら生徒の実態に合わせて授業を作っていることなど、大東の良さやうちの学校の課題がはっきりと分かりました。とても大事な会だと思いました」「学力や家庭環境の違う学校での授業見に行くのが楽しみ、という声多いので、ぜひ来年度、法政高校への見学実現出来たらと思います。とはいえ、無理せず、状況に応じて、参加・不参加もゆるやかにやればと思います」などのコメントを参加者から返してもらっている。

また、2 月 21 日の授業をひらく取り組みの参加者からは「こうした、授業をたがいに見る機会を増やそうという取り組みは大変貴重なものと思います。法政国際の方もお見えになっておりましたが、附属の方も一緒になりこうした取り組みが広がればよいと思います。また大学との連携にも広げられるとさらに良いものになるように思います。理工学部で理科教育法を担当していた方々やキャリアデザイン学部の方たちとの協力も視野に入ると面白いのではと思いました」というコメントをいただいている。

早速今年度は、昨年度の失敗を活かして、今年着任された 3 名の先生方に授業をひらいていただいた。

授業をひらいていただいたフレッシュな 3 名の方々からは次のコメントをそれぞれいただいている。

「普段自分では気が付くことができなかったことを“早めに”発見できることも、ひらく会の意義の一つかもしれないと思った。年度や学期の早期の段階で実施することは今後の方針などに影響が与えられるいい機会なのかと思った。年度末や学期末にやることは、次の長期的な見通しをするための準備期間として機能するだろうということも予測できる。なにより、自分の授業を見て感想をもらう機会は、意図的に起こさなければ基本的にはないと考えると、今後も継続してやってみたいと思っている」

「生徒中心の見取りということで、授業者が見えなかった生徒の様子を観察者に見ていただける機会は貴重なものでした。こちらがあまり気にかけていなかった生徒の鋭い意見、その前後での表情や仕草、授業への取り組み方等をフィードバックの時間で詳細に振り返ることができたので、生徒を知るきっかけにもなりました」「タブレットに「問い」への回答を入力する間、クラスメート同士の「活動」は行われていなかった。対話や議論などの「活動」を取り入れることによって、「問い」に対して、より生徒に自分事として考えるよう促していくことは大切である。生徒全員に授業における「問い」を自分事として考えさせつつ、学校・クラスという空間を活かした「活動」をどう取り入れていくかは今後の課題である。今回のように改めて自身の授業における課題点を洗い出せて良かったと考えている。現実問題に対し、生徒が自分事として考える授業を追求し続けていきたい」

授業をひらくことが日常となっている学校の先生方からすると今回の報告は非常に「小さな一歩」に見えられる。しかしながら、本校にとって今後に向けてワクワク感のある実践への一歩となると考えている。冒頭に書いたように「地味」ではあるが、可能性や展望を感じる部分である。引き続き他校の実践に学び、同僚同士で探求し合いながら法政にあったスタイルの教育実践につなげていきたい。



4 月月間合同カンファレンス報告

新たな視点を得るカンファレンス

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

長谷部 瑞季

4 月のカンファレンスは、私にとってこれまで意識してこなかった視点を得る機会となった。

またそのような視点を新たに取り入れて自分の経験についてより多様な角度から検討することを可能にする事は、カンファレンスの大きな役割の一つであると言え、「金曜カンファレンス、および月間カンファレンスは、自らの学びにおいてどのような役割を果たしているのか」についても改めて考えさせられる機会となった。

私のグループのメンバーには、特別支援学校の先生がいた。その先生は主に医療的ケア児と関わっており、そのような子供の殆どが、意思表示が難しい状態である。特別支援学校でインターンをしているメンバーとこれまで話す機会や、また学部時代に特別支援教育コースのメンバーと話す機会、また特別支援教育を専門としていた先輩の長期実践報告書を検討する機会があったが、意思表示ができる子供との関わりが中心であり、「発語がなかったり、意思表示をすることのできなかつたりする子供とはどのように関わっていくか」について考える機会はなかったように感じる。また、自らの見取りも振り返ると、子どもの言語や意思表示から見取っていることが多く、非言語的側面については少なかった。先生は、発語や意思表示のない子供の見取りを行う際には、子供にとって過ごしやすい環境になった際に子供がわずかに笑うような表情の変化があるなど、非言語的な要

素に着目して見取りを行っており、また看護師や医者といった学校外で子供をサポートする人々とも連携しているということが分かった。

現在私は、金曜カンファレンスで見取りについての資料を検討している。見取りのやり方や、なぜ見取りをすることが大切なのかについては、昨年 1 年間で附属義務教育学校の子供たちと向き合っていく中で考えを固めていた。しかし、改めて見取りについての資料を検討すると、昨年は気づかなかった新たな課題が明らかになった。これらの課題は、自らの中で「見取りとはどのようなものであるか」という自分なりの答えが昨年よりもはっきりとしたこと、また附属の先生方から多くの事を吸収させていただいたことによって見えてきたものであると私は考えた。

今回のカンファレンスは、私がこれまで見ることでできていなかった事例を、他のメンバー自身の視点や考察を交えて知ることによって、新たな視点を得ることができたこと、そして見取りの非言語的側面について意識する機会となった。

金曜カンファレンスで資料検討、及び見取りについて自らの考えを固める事をさらに進めていきつつ、今後の月間カンファレンスでさらに多くのメンバーから新たな視点を吸収していきたい。

新たな1年

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市明新小学校

劉 靖宇

今年度の新入生オリエンテーションのとき、「4月のカンファレンスは2日間だったな」と思い出し、懐かしさを感じました。引っ越しのあの日から、もう福井に来て2年目になりました。時はこんなに早いと思わなかったです。この1年間で何を学んだかということ考えた時、「自分の授業観が変わった」ことを感じています。

昨年4月のレポートを見返して、「いい授業を作りたい」という言葉が何回も出てきました。「面白い形」「わかりやすい工夫」「身近な内容」を授業に取り入れたら、きっといい授業になるだろうと信じていました。しかし、この1年間のインターンシップを通して、今までの考えはすべて教師目線ではないかと感じ始めました。そうすると、授業は誰のために作るのが、と悩みました。そんな時に、いつだったか、誰だったかは覚えていないのですが、「教師は子どもの姿を見て授業をデザインするじゃないか、子どもは迷っていることを教えるじゃないか」という声が耳に入りました。たしかに、子どもの勉強だから、子どもの様子を見ながら授業をすることが一番大事ではないだろうか、と考えるようになりました。

変化が遅かった自分は、自己紹介のときに、展望の話ばかりをしました。振り返りについては達成感がないので、手短に終わりました。しかし、M1の院生は、次のように述べました。「たとえ失敗しても、きっとその中でいいことがある」と。

私は、インターンでの授業実践について、ICTを用いて行いました。授業が終わりかけた時に、私は手書きが苦手の子どものスライドを見たのですが、驚き

を隠せませんでした。文章を書くのが苦手な子どもがタブレットを用いて、こんなにわかりやすいスライドを作ったことが信じられませんでした。このような経験から、私はICT活用の授業を諦めたくはありません。ICTは誰かに助けるかもしれないので、教室で一斉にタブレットを使用するより、手書きとタブレットの両方を使う「ハイブリッド授業」を作っていきたいと思います。

そして、最後に長期実践報告書ですが、昨年授業研究・専門性開発コースを修了された先輩の報告書を選ばず、ミドルリーダーコースを修了された方の報告書を選びました。なぜかというと、昨年のインターンシップ先が附属の前期課程であったことに関係しています。附属の子どもは、探究型学習や社会創生プロジェクト(総合)などの教科はすでに慣れているので、流れは上手く進んでいます。このような理想的な授業では公立に持っていきたいと思いますが、いきなり授業の中で探究をすることは、やったことがない子どもにとって困り感が生じるのではないだろうか、と考えます。したがって、授業技能の向上より、知識とは異なる「ソーシャルスキル能力」を向上させることが先にあると思い、「ソーシャルスキル・トレーニング」や「ファシリテーター・トレーニング」に関して書かれた実践報告書を読むことにしました。満足でした。

今年は、理論と実践の往還にチャレンジしながら、附属のいいことを公立学校に運べるように頑張りたいと思います。

1年前と違う景色で

ミドルリーダー養成コース2年/石川県立明和特別支援学校 東 永見

教職大学院に入学して、2年目を迎えた。教職大学院での1年間の学びを通して、1年前とは違う景色で、4月のカンファレンスを終えた。

コミュニティが発展するという体験

4月のカンファレンスは、オンラインで参加した。2日間のうち、1日だけ一緒にいた方が、ほぼ同じメンバーで2日間を過ごした。教育改革資料や長期実践研究報告を読む時間もたくさんとられていたが、このグループがコミュニティとしてどんどん発展していくような感覚があった。昨年度のカンファレンス等を通して、年齢や経験年数、校種が違って学び合えるとは思っていた。そして、今回、対面でなくても、たった2日間であっても、コミュニティは発展するという体験をした。グループのそれぞれが、どういう気持ちで臨めば、こんな風にコミュニティとして発展していけるのだろうか。私は、どういう視点で対話に臨んでいたのだろうか。

中森先生の言葉から気付けた、自身の変容

私は、岩本幸裕さんの長期実践研究報告を読んだ。表題は、「障害のある子どもの思考力の育成を目指して」、サブタイトルは、『子どもの「やりたい」に向かい探求することを大事にした個別学習』である。岩本さんとは、特別支援ゼミで一緒にいたことがあった。特別支援ゼミで大事にしている子どもの見方を、岩本さんがどんな風に子どもとのかかわり合いに活かしているのかを知りたかった。

岩本さんの長期実践研究報告では、具体的な子どもの姿が書かれており、その場になくとも子どもの姿がイメージできた。そして、岩本さんが子どもの姿をどう捉えて、どういう風に働きかけたのかも丁寧に書かれてあった。岩本さんの長期実践研究報告の書き方と自身が記録を書く際に大事にしていることに重なるものを感じた。

現在、私が記録を書く際に意識していることは、自分の捉えや解釈を文字に表すことである。子どもの姿があつて私が働きかける、その間にある「子どもの姿をどう捉えたのか」を表面化させることである。無意識に捉えていることを表に出すことで、その捉えが実際の子どもの姿と重なっていたのか、そうでなかったのかを考えることができる。そして、次の子どもとのかかわり合いにつなげることができる。

報告の後、中森先生から「岩本さんの話と東さんの話が、しっかりリンクしていた」と言ってもらった。1年前では考えられないことだった。私は、誰かの実践を自分の実践と照らし合わせて考えることが弱い。昨年度の夏季集中講座のサイクル2で、同じグループだった院生さんたちが、読んだ本の内容からいきいきと自身の実践について話をした。年齢や経験年数、校種も違う二人ともが、自然と自分の実践につなげて話をしていくのに対して、私にはそれができなかった。その差は、何かができるとかできないとかそういう話ではなく、教育にかかわる者として、致命的な気がした。しかし、今回、中森先生に「しっかりリンクしていた」と言ってもらえて、自身の変容を感じた。1年前より変容した自分を嬉しく思った。

コミュニティを構成するメンバー

同じグループだった長谷部さんは、揚原佑さんの長期実践研究報告を読んだ。表題は、「悩み続ける中で見えてきたこと」、サブタイトルは『様々な「出会い」の中での学び』である。長谷部さんは、揚原さんの長期実践研究報告の話をする中で、「サウナコミュニティというのが面白い」と言った。揚原さんは、教職大学院の先輩とサウナに通うようになり、サウナにはいついってるときやサウナにはいつた後の時間が、互いの授業実践を語り合う機会になっていた。

長谷部さんに「どんなコミュニティに所属したいか」と質問すると、長谷部さんは、「年齢や立場（支援員さんも含めて）にとらわれずに、子どもたちに向き合っている方たちがいるコミュニティがいい」と言った。質問をしてすぐに答えが返ってきたことから、長谷部さんが、誰と何を話し合いたいかを日頃から考えていることが伝わってきた。また長谷部さんが、子どもたちにかかわりのある人たちと話し合うことを大事にしていることも伝わってきた。

私は、学校の教員という立場で、学校の中でどうコミュニティを作るかに目を向けがちである。現在、

私は訪問教育を担当している。訪問教育とは、障害が重度・重複していて学校に登校することが難しい児童生徒に対し、教員が家庭等を訪問して教育を行うことである。訪問教育の子どもたちのことを、同じ学校の先生方に知ってもらうことも大事だと思う。しかし、子どもの話をする際には、その子に直接かかわりのある人たちと話し合うことが一番大事だと思う。訪問教育の子どもたちでいえば、訪問看護師さんや訪問リハビリの理学療法士さんたちである。これまでのカンファレンス等でも、たびたび出会ってきた大事な見方を、長谷部さんの子どもたちを想うまっすぐな姿勢から、また教えてもらった。

Stay Curious, Find Your Drive

ミドルリーダー養成コース2年/勝山市立勝山北部中学校

Lauren Nichole Hartford

At the conference, the ideas shared by various people were highly motivating and encouraging. It was an excellent opportunity to reflect on my teaching and learning and look towards the future. I was surrounded by people at the same stage as me a year ago, those who were ahead of me and my peers. This circumstance allowed me to reflect on myself and my progress more profoundly.

One of my advisors noticed that I seemed different this year, and I feel more confident and comfortable in my skin as a teacher in this program and at my schools. For instance, I have become more adept at incorporating technology into my lessons, which has significantly enhanced student engagement. I have also started using more interactive teaching methods, such as group discussions and role plays, to foster a deeper understanding of the subject matter. These changes were discussed at the conference.

A sentence stuck with me during the opening presentation: "We shape our theory, but simultaneously, we must change and realize our change to provide better education." The second half of this remark resonated with me. Changing and adapting our teaching is

necessary. It is also crucial to acknowledge and reflect on the changes we make. We need to take time to understand how and why we changed and how this change can improve our classrooms for our students. As an English teacher, I know language is alive and constantly evolving, as are our theories, knowledge, and practices. I am actively changing from a recipient of knowledge to a contributor.

If there is one piece of knowledge, I hope to contribute to anyone reading my newsletter, it is this idea: we must find our drive for education and our curiosity for constantly learning. No one can give us these two crucial things. It is up to us to find them. If we are not curious, any knowledge we uncover will be rendered useless, regardless of its amount or contents. If we are not motivated and driven, any connections and opportunities we find will be pointless. We cannot and will not always feel curious and driven about every aspect of teaching, and that is okay. We must remember to give ourselves grace. Nevertheless, finding at least one thing that ignites this fire within our teaching souls is vital. There is no one way for us to succeed as educators, but every way includes curiosity and drive.

It was inspiring to share with people from various stages of their DPDT journey. I felt comfortable and confident expressing my thoughts and ideas within this once-unfamiliar system. I was also humbled by absorbing information and ideas from my advisors, my senpai, my peers, and those just beginning. I reinforced forgotten goals and passions, like psychology, while understanding different experiences and perspectives.

Through these discussions and reading Nate's report, I realized that connection is the most important thing I have learned and found in this program. I thought about the connections I have made with people past and present, and I imagined how future educators can connect with us. Connection and learning are inseparable. We cannot learn without connecting to

others, readings, lessons, or experiences. When we connect, we will learn. We could try to force ourselves not to, but we would still learn something in the end, no matter how small.

Watching my growth and that of others around me is motivating and exciting. I am excited to continue reflecting on my strengths and weaknesses to improve as a teacher and a person. I must remember not to take myself seriously but to take my work seriously. Hearing that many programs are beginning to implement the practices and systems we have at the DPDT is encouraging for the future. I believe our learning style has many benefits that can help others around the country and the world.

4月のカンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース2年/神奈川県座間市立旭小学校 川田 奈津子

1年前、不安とワクワクが混ざった気持ちで4月のカンファレンスに参加していた。2年目を迎える今回は不安や戸惑いを抱え、ネガティブな思考になっていた。

今年度異動により、旭小学校へ赴任した。非常勤や臨任を含めるとすでに何校か異動を経験しており、新しい職場に入ることに抵抗はないと思っていた。これまでと同じように担任をもつことや分掌も同じであると聞いていたこと、前任校と通勤距離が変わらないことや、これまで一緒に仕事をしたことのある同僚も多くいて安心していた。ところが、学校が変わることは外的環境が変わるだけでなく、目に見えないその学校の風土や教師集団が作りあげている考え方や取り組みの軽重も違うということにストレスを感じていたのだった。特に、コロナから数年の間に変化したICT機器の導入や一人ひとりの端末の活用、推進、校務ソフトと評価作成との連動についての捉え方や取り組みの違いに戸惑っていた。急速に変化したとはいえ、市内同じタイミングで導入され、各校の情報担当が情報を共有しながら取り組んでいたの、同じように進められているものだと思い込んで

いたのかもしれない。また、教職大学院での長期実践研究においても、このタイミングでの異動は前年度まで取り組んできたことが継続できないという不安にもつながっていた。そのような鬱屈した心境を抱え、私は3つの種を語った。

今年度、2年目の若い教員M先生と、私と同じように異動してきた中堅教員と学年を受け持つことになった。M先生は初任の時のように指導教員がすぐそばにいないことや数人の教師が学級にかかわり、授業を受け持つということがなくなり、不安をもちながらも教材研究に熱心に取り組んでいた。ところが年度はじめの授業参観・保護者会を前に体調を崩した。

M先生の事例は、若い教師の育ちに私たちはどのようにかかわっていくことが求められるのだろうか、という話題につながった。ICT機器のスキルや活用について、多くの知識を持ち、新しいことにもやってみようというエネルギーももっている反面、どこに困難を抱えるのかが見えにくく、当事者もわからないのではないだろうか、という話に共感した。これか

ら教育実習生を指導する予定になっている先生もこの話し合いを通して、改めてどのように接していけばよいのか考えていた。そして学校風土や職員室の空気感も大切であり、自律的・主体的に学び続ける教師を後押しする同僚性の役割も重要であると資料と事例を合わせながら理解することができた。

Cycle3 では長期実践報告を読んだ。これから長期実践研究報告を書くにあたり、私は自分のテーマがまだ見えていないにもかかわらず、異動したから研究が継続できないと思っていた。そもそも継続しようとしていた研究とは何か、を自分に問い直していた時、鈴木先生の長期実践研究報告『問うて語りうるコミュニティをめざして』が目に入った。文章の中に多くの問いが記されていた。その問いは自分自身に向けられたものでもあり、同僚の教師に向けられたものでもあった。専門性が特に強い集団というイメージがある高校で、コミュニティを作ろうとする実践に関心をもった。その過程の中で浮かぶ問いに向き合うことで自分と同僚との関係性を深めていた。私の関心も問いであり対話であり場である。それは、勤務場所が変わるとできないものではないことに気づくことができた。グループでの交流では、対話をキ

ーワードに話が進んだ。職員の対話を支援するための管理職の動きや地域の人とつながるための対話など興味深く話を聴くことができた。

憂鬱な気持ちで始めたカンファレンスだったが、Cycle3 を終える時には自分の表情もゆるんでいる気がしていた。7月のラウンドテーブルの話を聞きながら、あの実践をまとめて語ろうかな、と前向きに考えている自分がいた。また、これまで他の方の話を聞いては、自分はいしたくないと感じていなかったが、異動して感じるギャップは今まで積み重ねて取り組んでいたからこそ感じるギャップであり、頑張っていた自分を肯定的に受け止めることができた。そして、異動したことによって、自分の研究が閉ざされてしまうのではないかと考えていたことも、実践が広がるチャンスかもしれないと考えるとワクワクすることもできた。周りを見渡すと、東京サテライトにも新しい仲間が増えて、表情豊かに語る姿に、学びに向かう喜びを改めて自分自身も感じることができた。また、1年共にした同期生とも職場の様子や近況を語り合うことで居心地の良さを感じていた。本当に感謝しています。引き続き、今年度もよろしくお願いします。

問い直しの4月合同カンファレンス

学校改革マネジメントコース2年/同志社中学校 田畑 彰子

教職大学院2年目がスタートした。4月の合同カンファレンスの2日間は自分自身に『何を大切にするのか』『何をしていくのか』何度も問い直す時間となった。

昨年度を振り返ってみると、資料の分からない単語に戸惑い、自分の発言がこれでいいのかという不安を常に持ちながら参加していたように思う。

森田先生の「教育改革の展開を吟味することの意味」というお話から、「私たちは何をよりどころに教えているのか？理論のない実践はなく理論は自分の実践の中にある。内なる理論が土台となって「〇〇観」

が形成され現在の自分が成り立っている。「内なる理論」の捉え直しの視点が多様になっている。今の自分の「内なる理論」を明確にその理論とこれからの教育の在り方と照らし合わせ自分自身で実感していく」が、強く印象に残った。実践的な自己紹介の後だったこともあり、自分のこれまでの経験が現在の自分に大きく影響を与えること、変容する力が求められていることを改めて感じた。『立ち止まり・振り返る・時間・場・意識』カンファレンスの時間をもっと大事にしていかなければとも思った。

Cycle2 では、UNESCO「教育を再考する」の資料を読んだ。社会の変化に対応し、将来を見据えた教育の在り方を問うもので、学校は、より公正で、公平で、持続可能な未来に向けた世界の変容を促す場として再考されるべきとされている。自分が目の前のことにとらわれすぎていること、学校の外のこと、世界、いや地球規模の広い視野が求められていることに気づかされた。学習の4つの柱—知ること、行うこと、存在すること、共に生きること—を反映したカリキュラムの必要性、それを支えるための教員は協働、省察、対話への参加が促されている。自分の言葉で語ることで、見える世界が変わる。問いや課題が見えてくる。“子どもと教師の学びは相似形”というよく耳にする言葉も、グループでの語り合いによって、さらに深く理解することができた。

Cycle3 長期実践研究報告を読むでは、昨年の「三つの種」実践的な自己紹介で一緒にさせていただいた川崎先生の実践報告を読んだ。まず先生の教育観や授業観の変容、それから学校全体を意識されてからの展開を引きこまれるように読んだ。子どもたちから対話することの大切さを学んだ先生が、研究主

任を経験し、みんなが共通理解して同じ目標に向かう体制の大切さ、無理をせず取組みやすい方法を考える大切さを学んでいく。何かを決めなければならないという必要に迫られたディスカッションではなく、子どもたちについてグループで語り合う、聞きあう研修を取り入れていく。タイムマネジメントと自ら学びたいという気持ちをもってもらうことに気をつけられ、それぞれの教員が何を求め、必要としているのかを探るための普段からのコミュニケーションが必要で、チーム学校としてすべての教員が自分事として学んでいける組織をつくっていききたいとあった。自分に置き換えながら読み進めることができた。参考になる点が多くあり、取り組んでみたい。

私のめざす「協働できる集団」とはどんな集団なのか、そのために何を大切にしながら取り組んでいくのか。答えは明確にでないけれど、今年度は常に問いをたてながら、仲間と対話しながら、共有しながら実践していきたい。

最後のクロスセッションでの印象に残った言葉。
『自分がどうありたいのか』

学び続ける教員でありたい。

4月合同カンファレンスを振り返って

学校改革マネジメントコース2年/社中央第一こども園 山田 晶子

福井大学教職大学院に入学して、2年目に入った。4月の合同カンファレンスまでに「3つの種」を考えなくては…と、去年はどんなことをしたのか？いろいろと振り返りレポートを読み返していた。

課題だらけ。どこから手を付ければ良いかも分からない。と迷いしかなかった昨年の4月。カンファレンスという初めての経験をした。初めて出会う先生方と話をするなんて…変なこと言っていないかなあ？こんな事言ったら笑われるかも…と恐る恐る話をし始めたことが懐かしい。どの先生方もとても温かく「みんな一緒ですよ」と悩みを自分事として聞いて下さる。温かいアドバイスの言葉を頂き、なるほど

と思うような新たなヒントをもらいやってみると自分の思い描く実践が少しずつ形になって始まった。

4月の合同カンファレンスの「3つの種」は、森田先生がお話しされたように、書くことでこれまで自分が大事にしてきたものの捉え直しが出来る。書いてきたものを話すことによって自分の考えを整理できる。質問やコメントをもらうことで「ああ、私はこんなこと大事にしていたのか」と自分の考えをもう一度確認や整理することが出来た。

私の勤める園では、昨年からは実践が少しずつ動き始めている。「実践の往還」という話も聞いた。私の勤める園の課題と同じで、実践はするが、振り返りは

弱い。実践をして、語って、聞いて、記録して、立ち止まる、そしてまた動き出すサイクル。私は、実践をするとついつい上手くいったかどうかの結果に目が行ってしまう。しかし、本当はそうではない。この実践が上手くいっても、上手くいなくても、やっている実践がどういう意味を持つかしっかりと語り合っ
て記録に残す。終わってどう考えたかを記録に残してこそはじめて実践になるのだ。と改めて学んだ。

4月の合同カンファレンスは、土曜日・日曜日と2日ある。この2日間は、私の2年目の方向を定める貴重な日となっている。まず、じっくりと教育改革の資料を読む。普段の生活では資料を読む機会なんてあり得ない。時間がきちんと保証されないと読みたくても後回しになってしまう。難しい言葉もいっぱいある。知らない言葉を調べ「そういうことか〜」と大変だけどなぜか楽しい。読み解いた後に、みんなでどう感じたか考えたことを紹介し合い「こういう読み解き方もあるのか?」とか、「私もそう思った」と読み解き方が同じだと「間違ってたかった」と、安心している自分がいた。

また、長期実践報告を読む時間がある。歴代の先輩が、課題を持って取り組み、大きな壁にぶつかって、

もがき苦しみ長いトンネルから一筋の光が見えてくる。読み始めると、何か涙が出る。読んでいるうちに引き込まれてしまいあつという間に時間が経ってしまう。

長期実践報告を読み、グループで話し合っているうちに、今年の私がやろうとする実践が形には表せないがフワフワと浮かび上がってくる。また、この二日間で私が昨年度に上手くいかなかった原因も見えてきた。実践を進めるために焦る私。ついつい口と手を出そうとしていた姿が気付かされた。園全体で改革をしようとするための具体的な目標や方向性をもう一度丁寧に話し合いをしなければ…と気付かされる。

4月の合同カンファレンスを振り返り、どうしようという迷いから、「とりあえずやってみて、またみんなで考えよう!」と前向きな気持ちになった。そして、まだまだゴールは見えないが私の勤める園の先生と一緒に取り組みたいという気持ちはますます大きくなっていった。

今年度も一年どうぞ宜しくお願い致します。



研究紀要紹介・書評

奈良女子大学附属学校園における実践研究について

福井大学連合教職大学院 教授 鮫島 京一

福井大学の教師教育研究の特徴は、これまで蓄積されてきた実践研究の「遺産」を活かしつつ、現代化するところにあると私は考えています。こうした大きな試みに、今回、奈良女子大学の附属学校園（幼稚

園、小学校、中等教育学校）で展開されている実践研究をつなぐことができる機会をいただきました。

奈良女子大学には前身である奈良女子高等師範学校の伝統を受け継いだ、3つの附属学校があります。

大学は女子大学ですが、3つの附属学校は男女共学です。福井大学とは、2015年に附属中等教育学校が拠点校協定を締結し、翌2016年からは附属幼稚園と附属小学校が加わり、奈良女子大学附属学校園として拠点校となっています。附属学校園が福井大学と連携を深めていく中で、2018年4月から、奈良女子大学も福井大学を基幹校とする連合教職大学院に加わりました。奈良教育大学との法人統合により2024年3月をもって大学は連合教職大学院から離脱しましたが、附属学校園は現在でも拠点校です。現在までに、幼稚園から3名、小学校から3名、中等教育学校から4名の教諭が福井大学の教職大学院で学びました。その学修の成果については、福井大学の長期実践研究報告書をご覧ください。ここでは、附属学校園の実践研究について、その特徴と紀要などへのアクセス方法について紹介いたします。

1. 附属幼稚園

附属幼稚園は1912年に発足し、「主体的に身近な環境と関わり、豊かな感性で自らの課題を解決していこうとする子どもを育てる」ことを教育目標に掲げ、閑静な住宅街と豊かな自然環境（園庭）を



『教育システム研究』(第18号 2022年)

活かした実践研究を積み重ねています。研究成果及び研究開発報告書については、奈良女子大学学術情報センターのリポジトリ検索 (<https://opac.lib.nara-wu.ac.jp>) より「奈良女子大学附属幼稚園」と入力いただければご覧いただけます。2015年から2019年までは幼少一貫教育、2020年からは幼児教育の実践研究を展開しています。また、奈良女子大学教育システム研究開発センターが発行している『教育システム研究』 (<http://www.narawu.ac.jp/crades/journal.htm>) には、幼稚園教諭による個人研究の成果が掲載されています。2020年以降、幼稚園の実践研究は、福井大学との連携を深める中で、幼児教育の実践研究センターとし

て機能強化するために、幼児期教育を中核に据えた実践コミュニティとして歩み始めています。

2. 附属小学校

附属小学校は、附属学校園で最も有名です。同校は1911年に設置され、1919年に同校の主事に就任した福井県出身の木下竹次が主唱した「合科学習」により、日本の小学校教育史に欠かせない存在となっています。現在に至るまで「子どもたちが自ら伸びる」という教育精神に基づいた「奈良の学習法」の実践研究を積み重ねており、同校が発行している

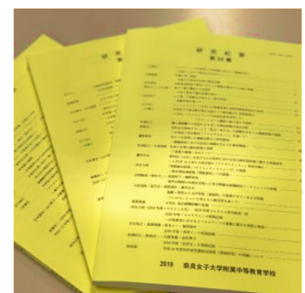


『学習研究』(創刊号 1922年)

『学習研究』は「奈良の学習法」のもとに集う全国規模のネットワークを維持し続けています。先述の『教育システム研究』への寄稿もさることながら、年4回発行している『学習研究』が附属小学校の実践研究の過去・現在・未来について理解を深める上で最良の刊行物となっています。こちらにつきましては、<http://www.nara-wu.ac.jp/fusyo/tyosyo/kenkyusi1.html> にてご覧いただくことができます。

3. 附属中等教育学校

附属中等教育学校は1908年に創設された奈良女子高等師範学校を前身とし、2004年より現在の附属中等教育学校となりました。「自由・自主・自立」の教育精神に基づい



『研究紀要』

て、中高一貫教育とスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の領域で実践研究を積み重ねています。同校が発行する『研究紀要』は、2000年代以前は個人研究が多くを占めていましたが、それ以降は中等教育学校としてのカリキュラム研究、SSHとしての研究開発報告書となっています。『研究紀要』につきまして

は、<https://nwuss.nara-wu.ac.jp/academic/bulletin/bulletin1/>を、SSH の研究開発実施報告書の概要につきましては、<https://nwuss.nara-wu.ac.jp/ssh/outline/efforts/annual-overview/>をご覧くださいだと思います。なお、『教育システム研究』では、大学と連携したプロジェクトや新しい実践研究の試みなども掲載されています。

4. 附属学校園による協働研究の胎動

附属学校園が協働して行う実践研究については端緒についたばかりだと言わざるを得ません。その中でも、附属幼稚園の教諭であり、連合教職大学院のコーディネートリサーチャーの経験を持つ松田登紀さんによる実践研究「当事者としての小学4年生が語る『小学生になること』——幼小以降期を振り返り『小学生になること』をどう意味づけるか——」（『教育システム研究』第17号、13-25頁、2021年）は、今後の方向性の一つを示しています。対話、省察、実践コミュニティをキーワードとする福井大学の実践研究に触発された、奈良女子大学の実践研究を象徴する労作です。

以上、簡単な紹介となりますが、奈良女子大学の附属学校園の実践および実践研究を貫いているのは、以下のような人間観と教育観ではないかと考えます。

人間にはもともと自主性が備わっている。その自主性に働きかけることから教育実践を立ち上げていく。自発性がいつ、どこで覚醒され、発揮され、拡張されるのは園児・児童・生徒によって違う。だから教

師は学び続けるのだ。そのような教師の学ぶ姿を見て子どもは育つ。では、学びの目標をどこに置くのか。自律した人間になることである。そうなることを支え促すのが学校であり、公教育の使命である。

道のりは遠いのです。掲げた旗に一步でも近づいているのか、あるいは遠のいているのか。はたまた「伝統」ないし「遺産」にあぐらをかいていないだろうか。附属学校園をめぐる状況が厳しさを増す中で、自分たちのありようや進むべき道が見えにくくなっているのも、残念ながら事実です。そのなかでも実践は積み重ねられています。私見では、附属学校園をめぐる厳しさは、附属学校園における実践研究によって、公立・私立の学校における実践研究が質を高めた結果、つまり、附属学校園の実践研究の質が下がったというよりも、公立・私立の学校における実践研究の質が高まった結果ではないかと考えています。したがって附属学校園が当面している状況の厳しさは公教育の質を高める好機だと言えます。附属学校園には、教師が直面している課題を設定し、解決を示すという物語で歩む時代が一つの区切りを迎え、持ち前の課題設定力と研究開発能力を活かして、現実の篩によって鍛えられた、多くの実践者の直感や知見が集まる場になれるかどうか問われているのだと考えます。そのような方向に附属学校園が進むためにも、ここで紹介した附属学校園の実践研究を多くの人にご覧いただき、豊かな対話が繰り広げられていくことを願うばかりです。



お知らせ

福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校 令和6年度 教育研究集会 (第2次案内)



期日 **令和6年6月14日(金)**

会場 福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校

幼稚園 研究主題 (第Ⅲ期)

「つながりが育む学びの深まり」

幼稚園 研究副題 (3年次)

「好きが広がり、世界をひらく」

義務教育学校 研究主題 (第Ⅱ期)

「探究し協創するコミュニティ」

義務教育学校 研究副題 (1年次)

「共に学びを拓くカリキュラムを創る」

学校HP QRコード



主催／福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校

後援／福井県教育委員会 福井市教育委員会 福井県小学校教育研究会 福井県中学校教育研究会

附属義務教育学校

受付	児童生徒による オリエンテーション	公開授業Ⅰ/語り合い	公開授業Ⅱ	昼食	分科会（生徒参加）
8:20	8:50	9:45 10:00	10:55 11:10	12:00	12:50 14:15

公開授業Ⅰ（10:00～10:45/50）児童生徒との語り合い（10:45/50～10:55/11:00）

教科/学級/授業者	主題 / 「単元・題材」 / めざす授業
国語 5年1組 授業者：齋藤 創	言葉の世界観を広げよう 「言葉の意味がわかること」 「言葉の意味は面である」とはどういうことだろうか？事例を自分事して捉え直したり、言葉について書かれた他の文章を読んだりして、多様な意味をもつ「言葉」について追究していく。他者と考えを共有しながら、言葉の面白さや奥深さについて考えていく授業。
社会 3年2組 授業者：青柳 宏治	都会に比べてわたしたちのまちはくらしやすいの？ 「わたしたちのまち みんなのまち」 都会に比べてわたしたちのまち福井市はくらしやすいのか？様々な視点で福井市が私たちに与えてくらしやすいまちなのかを評価し、まちのくらしの背景を探っていく。自然環境や人口・交通・暮らしを支える人などの視点で福井市のくらしの様子を多面的に捉え、くらしやすさを考えることでわたしたちのまちの特色を明らかにしていく授業。
算数 6年1組 授業者：結川 宏幸	インスタ映えする写真をうまく撮るには？「拡大図と縮図」「比とその利用」 インスタ映えする写真を撮りたい。撮影距離やカメラの角度など、試行錯誤を繰り返しながら、何とかベストショットを撮ろうとする子供たち。ベストショットのコツをつかみながら、遠近法の仕組みを見出していく授業。
理科 6年2組 授業者：八木 敏恵	持続可能な空気を考えよう 「植物のからだのはたらき」「生き物どうしのかかわり」 二酸化炭素は、今後増えていくのか？多様な場所や生活場面で目に見えない空気の成分の割合を測定し、数値で比較しながら、二酸化炭素や酸素の割合が増減する仕組みに迫っていく。ものを燃やしたときやヒトの呼吸とつながげながら、自然界での植物の役割を捉え直し、多様な生物が共生していく環境をどのように持続していくかを問い続ける授業。
音楽 4年2組 授業者：中村 涼子	日本の音楽の特徴をさぐろう 「日本の音楽でつながろう」 日本らしい音楽のひみつって何だろう？歌や楽器で日本の音楽を表現する中で、日本の音楽の特徴をさぐっていく。仲間とともに、創作を通して日本の音楽のよさを味わう授業。
造形 1年2組 授業者：浅井 綾子	しかけおぼけをつくろう！～ふぞくおぼけやしき～ 「スルスルビューン」 学校探検で見つけた暗い場所…。ここにはどんなおぼけがいそうかな？暗闇で出会ったら驚くものを想像しながら仕掛けおぼけをつくっていく。仲間と協力して、ドキドキする世界をつくる楽しさを味わう授業。
体育 2年2組 授業者：小池 康一郎	いっちゃい！動きのお店屋さん 「多様な動きをつくる運動遊び」 ワクワクする楽しい動きのお店をつくりたい。動きの看板メニューをつくるため、仲間と共に試行錯誤しながら動きを工夫し、発展させていく子供たち。多様な動きの楽しさを追究し、他者へと広げ、運動の魅力を高めていく授業。
外国語活動 4年1組 授業者：布目 康裕	伝え合い、世界とつながろう！41グローバルプロジェクト 「Let's Try 2 Unit3 I like Mondays.」好きな曜日は何かな？ 友達や海外からのゲストのことをもっと知ってつながりたい！子供たちは、どう相手と深くつながることができそうかを、英語でやり取りをしながら探っていく。好きな曜日を尋ね合うことをきっかけに、自分と他者との共通点や違いを認め合いながら、英語でつながる喜びを実感していく授業。
技術 8年A組 授業者：高井 茂嘉	おいしさを追究した究極の野菜を育てよう 「生物育成の技術」 おいしい野菜ってどんな野菜だろう？多様な考えの中から「おいしさ」の定義を探し出し、栽培方法や環境要因などを考えながら究極の野菜を目指していく。育てながら学び、収穫した野菜を食べる活動を通して、生物育成の意義を様々な視点から捉えていく授業。

児童生徒との語り合いについて（各教科の授業後10分間）

授業で見取ったことを、直接児童生徒と語り合い、お互いの学びを深める時間として設定しています。ぜひ授業を受けていた児童生徒と教科の学びについて語り合ってください。

公開授業Ⅱ (11:10～12:00)

教科/学級/授業者	主題 / 「単元・題材」 / めざす授業
国 語 8年C組 授業者：野尻 麻香	「わかりやすい」も千差万別？文章の工夫を解き明かせ 「クマゼミ増加の原因を探る」 この内容なら、理科の教科書でもいいんじゃない？本文と理科の教科書や同じ理科の内容を扱う文章を比較し、内容に対する興味関心から筆者の書きぶりへと焦点を移して批判的に文章を読み深めていく。目的に応じた表現の工夫について考え、説明的文章を学ぶ意義を協働で考えていく授業。
社 会 8年A組 授業者：北島 正也	一極集中が進む東京、日本にとってこのままでいいの！？ 「江戸幕府の成立と産業の発達」「日本の地域的特色」「関東地方」 かつての田舎町「江戸」は、どのように大都市に発展したのか？地理・歴史両方の視点から江戸が発展した理由を協働で探っていく。首都・東京の形成のプロセスを明らかにすることを通して、日本における一極集中の功罪について考える授業。
数 学 9年B組 授業者：斎藤 恭央	振り子時計が刻む時間の秘密 「いろいろな事象と関数」 人類はどのようにして、正確な時間を計ってきたのだろうか？人類が長い年月をかけて生み出してきた時計の仕組みを、振り子の特性から見出そうとする子供たち。振り子を使って時間を計測し、新たな関数的な視点を見つけていく授業。
理 科 9年A組 授業者：佐々木 康順	台所に潜む科学を解き明かそう！ 「化学変化とイオン」 ケーキを食べる時、フォークから変な味がするのはなぜ？条件を変えて実験を重ねたり、情報をもとに仲間と意見交換をしたりするなど、これまでに身に付けたものを総動員して謎に迫っていく。料理や掃除など、台所の謎に迫っていく過程で、原子・分子・イオンの動きと関連付け科学的に捉え直していく授業。
音 楽 7年A組 授業者：畑中 結衣	音と音楽の違いを探ろう 「音楽ってなんだろう？～声や音にのせて～」 音楽ってなんだろう？絵から感じた印象を声で表現する中で、音と音楽の違いを探っていく。音楽を形づくっている要素を手掛かりに対話しながら、抽象的なイメージを音楽で表現することで、音楽についての捉えを広げていく授業。
美 術 7年C組 授業者：坂居 澄美	ふるさとの人気スイーツをプロデュース！ 「人の暮らしを豊かに」「じっくり見ると見えてくる」 福井の魅力いっぱいのスイーツを考案できないだろうか。福井の食や文化に触れる中で、「らしさ」が伝わるデザインを考え、人の目を惹きつける色や形を探っていく。ふるさとへの想いと、相手に楽しみや幸せを届けるものづくりへの新たな視点を拓いていく授業。
家 庭 8年B組 授業者：小寺 拓也	FUKUIラーメンを開発しよう！ 「食生活」 北陸新幹線の開業を機に、県外の観光客に福井の「食」をアピールするラーメンを作りたい！開発者として消費者の要望を踏まえつつ、食品開発に関わる様々なデータを分析する中で、福井を代表するラーメンに必要な要素を見つけていく子どもたち。開発者の想いやプロセスを体験していく中で、食品について多面的な視点を持つ良さに気づいていく授業。
保健体育 7年B組 授業者：赤尾 昌倫	結果にコミット～あなたに最適プログラムをおとどけ～ 「陸上（短距離走）」 50m走のタイムを縮めたい…。その想いに応えるために結成された専属チームが、数値やグラフ、映像をもとに課題発見から技能習得までの最適プログラムをつくりコミットする。結果を求めて共に走る中で、個から集団へ競技に対する捉えの転換を図る授業。
英 語 9年C組 授業者：河合 創	Our Lives or Animal Extinction? 「Unit 3 Animals on the Red List」 新しいスマートフォンのある便利な生活、ゴリラの自然で豊かな生活、どちらを優先する？人間の生産活動と動物の種の保全という矛盾について議論し、人と動物との共生について考えていく。英語で多様な他者と関わり合う場を創りながら、思考を再構成する授業。

分科会 (12:50～14:15)

- ①各教科の分科会 会場：義務教育学校の各教室
 前期課程と後期課程の公開授業における子供たちの学びをもとにしながら、教科の学びについて教師と子供たちが語り合い、義務教育課程における協働探究の在り方について考えていきます。
- ②幼稚園の分科会 会場：幼稚園
 実践を通じた園児の幼稚園での育ちについて協議していきます。
 分科会は3歳児・4歳児・5歳児合同で行います。

附属幼稚園

受 付	オリエンテーション	公開保育	公開授業Ⅱの参観 (義務教育学校へ)	昼 食	分科会 (3,4,5歳児合同)		
8:20	8:50	9:00	10:55	11:10	12:00	12:50	14:15

保育者	主題 / めざすあそび
あそび 年少/年中/年長 保育者：前田祐子 藤井衣利子 渋谷喜代子 廣瀬友加里 上田晴之 瀬戸真世	年少（3歳児） はやくあそびたい 一人一人が安心して過ごせる環境の中で、新たなもの・こと・人・遊びに自ら出会い、自分を出しながら遊びを楽しんでいく。自ら友達や教師と一緒に、いろいろな遊びに興味をもち、自分なりの好きな遊びを見つけていくには？教師に自分の思いを伝え、一緒に遊ぶことを通して、喜んで園生活を送ることを目指す。
	年中（4歳児） いっしょにあそぼ 好きな遊びを楽しむ中で、友達や教師（人）・様々な素材（もの）、ことなどの、自分を取り巻く環境に自ら関わっていき。多様な関わりの中で、自分や友達に思いがあることに気付き、また他者との思いの違いにも気付いていくには？いろいろな思いに触れながら、楽しんで友達と一緒に遊ぶことを目指す。
	年長（5歳児） ちからをだして 積極的にいろいろな遊びに取り組む中で、自分の好きを大切にしながら、目的をもって挑戦したり、友達と協力したりしながら遊び込んでいく。その中でもの・ことの特徴や面白さに気付き、試したり工夫したりしていくには？自分なりに探索し、遊びの中で感覚をひらき、自己を発揮していくことを目指す。

全体会・シンポジウム (14:30～16:30)

テーマ「学びを協創する子どもと教師」

シンポジスト

秋田 喜代美 氏
(学習院大学文学部 教授)

鹿毛 雅治 氏
(慶應義塾大学教職課程センター 教授)

コーディネーター

森川 禎彦
(福井大学連合教職大学院 客員准教授
附属義務教育学校 統括研究主任)



秋田 喜代美 氏



鹿毛 雅治 氏

オンライン生配信決定！

オンライン（Zoom）にてシンポジウムの様子を生配信します。ご希望の方は下記QRコードよりお申し込みください。後日、ID、パスコード等をメールにてご連絡いたします。

協働する主体同士がそれぞれの価値観や個性を認め合いながら課題解決に向けて力を発揮し、新たな価値を創造していく「協創」。本校園における協働探究が生み出す「協創」が、子どもたちのどのような資質・能力を培い、未来へとつながっていくのか。ご参加いただいた皆様と、子どもの学びの姿をもとにこれからの学校教育はどうあるべきかを考えていきたいと思います。

参加費 1,000円 (資料代)

※参加される方は、ご昼食を各自でご準備ください。
※申し込み方法：右のQRコードより必要事項をご記入の上、

令和6年5月31日（金） までにお申し込みください。

問合せ先：担当：森川（義務教育学校）・上田（幼稚園）

〒910-0015 福井県福井市二の宮4丁目45-1 Email: molmol3@u-fukui.ac.jp

tel 0776(22)6985 fax 0776(22)6703 HP: <http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/>

申し込み用 QRコード



Schedule

- 5/18 Sat.** 5月月間合同カンファレンス A 日程
5/25 Sat. 5月月間合同カンファレンス B 日程
7/6,7 Sat, Sun. 実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions
7/13 Sat. 7月月間合同カンファレンス A 日程
7/20 Sat. 7月月間合同カンファレンス B 日程
7/27 以降 夏期集中講座 **Cycle1(a:7/27,28,29), (b:7/30,31,8/1)**
Cycle2(a:8/3,4,5), (b:8/6,7,8)
Cycle3(a:8/10,11,12), (b:8/19,20,21)



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【編集後記】

新年度が始まり早1ヶ月が過ぎました。ハードな2日間の4月月間カンファレンスだったと思いますが、M1の皆様からのフレッシュな思いや意欲を、このニュースレターの原稿からも感じることができました。また、M2の皆様の1年間の学びを経たことでの自身の変容、更には、コミュニティの変化も記されており、編集者の私たちも力をもらっています。今号には、研究紀要紹介・書評が復活しています。皆様、是非ご一読ください。(H.T.)

教職大学院 Newsletter No.183

2024.6.8 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp